

第2章 アンケート調査

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

この調査は、公益財団法人みずほ教育福祉財団助成事業「80歳代高齢者の生きがいの持続的促進と社会的対応」の研究活動の一環として、80歳代の高齢者の普段の生活の状況や生きがいに関する意識等を把握することを目的に、ナルクの会員を対象にアンケート調査を実施した。

(2) 調査対象者

ナルクは約30,000人の会員のある日本最大の高齢者ボランティア団体である。その理念として「自立・奉仕・助け合い」を掲げ、時間預託制度などによりボランティア活動を積極的に行っており、平成27(2015)年で設立20周年を迎えた。また、活動の拠点として全国に125の支部を設置しており、組織的な取り組みを行っている。

したがって、ナルクは高い回収率が期待されるのみならず、プロダクティブ・エイジングの概念を用いて「80歳代高齢者の生きがいの持続的促進とその社会的対応」を研究する調査の対象として適切な市民団体である。また、標本抽出においても全国125支部の80歳代の会員約3,000人のうち、男女別なども考慮しつつ計1,000人を対象とすることは適切、かつ合理的であると判断した。

(3) 調査項目

調査項目は健康状態や日常生活の状況のほか、地域社会や人との関わり、社会活動、生きがいおよび幸福感についてなどを含めた計41項目で、実際に使用した設問および単純集計結果は「資料編」のとおりである。

(4) 調査方法および調査期間

調査方法についてはアンケート用紙をナルクの本部を經由し、全国125の支部に配付・回収を依頼し、該当者に回答してもらった。

調査期間は平成26(2014)年11月1日～12月5日である。

(5) 調査の回収率

図表4 調査対象者および回収率

対象者数	回収数	有効回収数	有効回収率
1,000件	754件	754件	75.4%

2. 調査の結果

(1) 回答者の属性

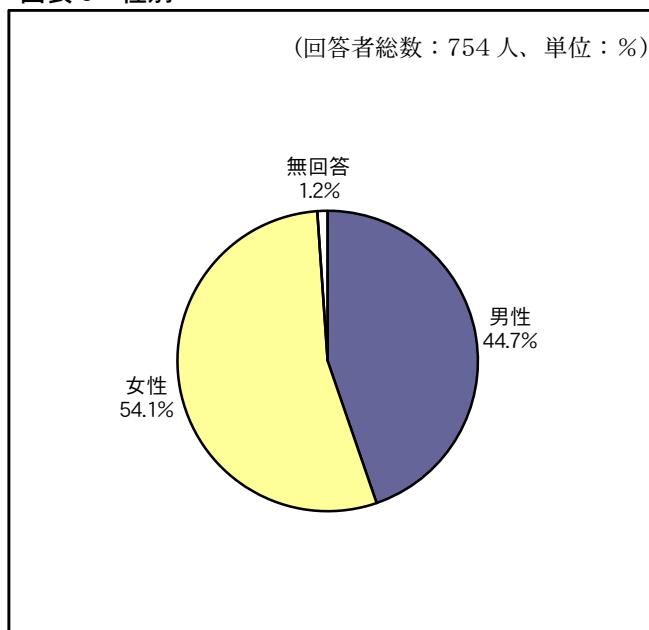
① 性別

問2 あなたの性別は次のいずれですか。 あてはまる答えの番号に○をつけて下さい (以下同じ)。

「男性」が 44.7%

性別については「男性」が 44.7%、「女性」が 54.1%となっている。

図表 5 性別



◆調査結果を見る際の留意点◆

①回答率について

- ・比率はすべて百分率で表し、小数点以下第2位を四捨五入して算出した。このため、比率の合計は100%にならないことがある。
- ・1人の回答者が2つ以上の回答をすることができる設問（複数回答）では比率の合計が100%を上回ることがある。

②表記について

- ・図表および文章中で選択肢を一部省略して用いている。
- ・文章中で選択肢を引用する場合、「 」を用いている。また、いくつかの選択肢を合わせて一つのまとまりとする場合、“ ”で囲んで表記している。

② 年齢

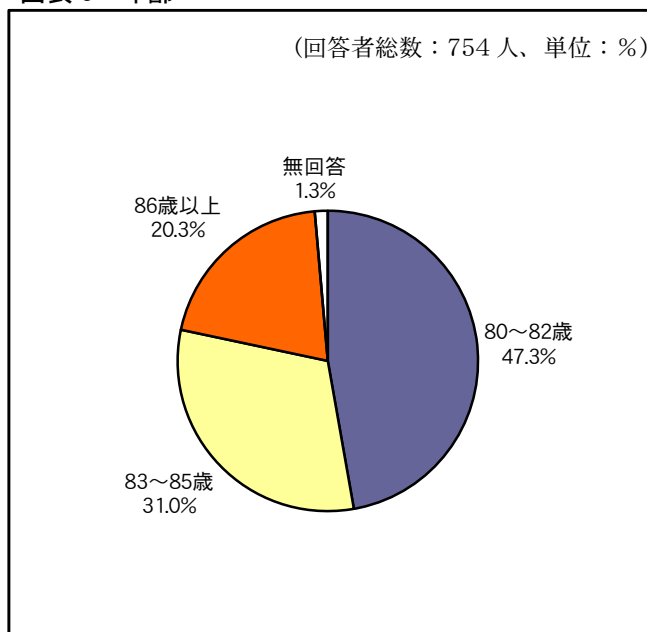
問3 あなたはおいくつですか。(満年齢でお答えください)。

「80～82歳」が47.3%

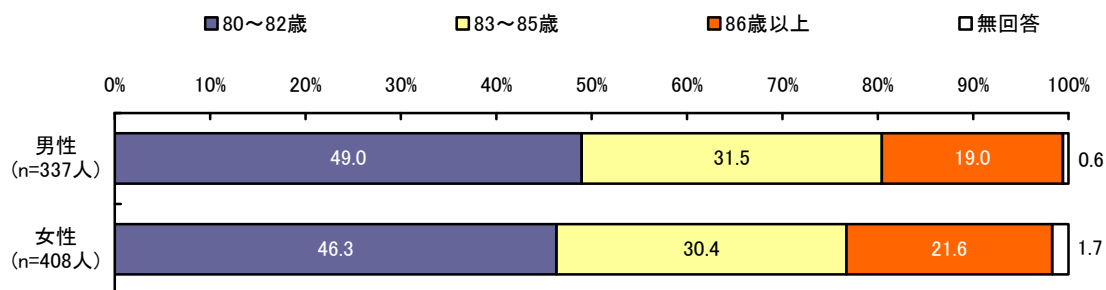
年齢については「80～82歳」が47.3%、「83～85歳」が31.0%、「86歳以上」が20.3%となっている。

これを性別にみると、男性は女性に比べ、「80～82歳」の割合がやや高くなっているものの、目立った差はみられない。

図表6 年齢



図表7 性別にみた年齢



③ 世帯形態

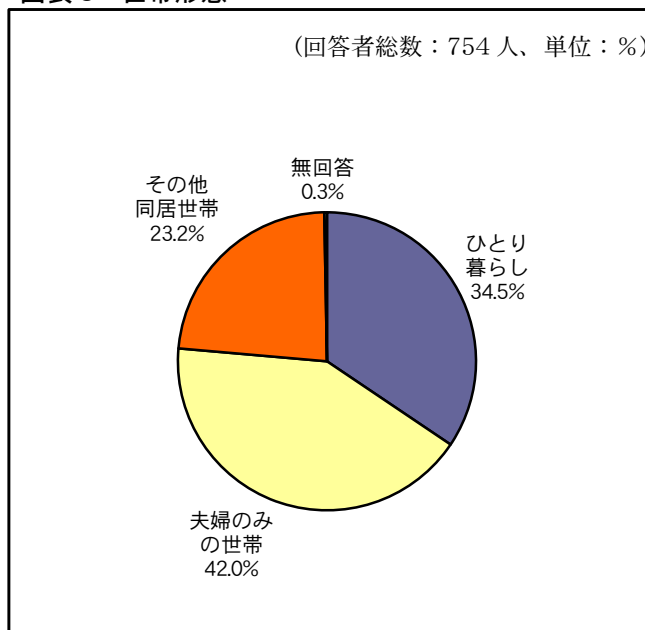
問4 現在の世帯は、次のうちどれですか。いわゆる二世帯住宅や同じ敷地内で別の棟に住んでいる場合も含めて、お答えください。(主なもの1つ)

「夫婦のみの世帯」が42.0%

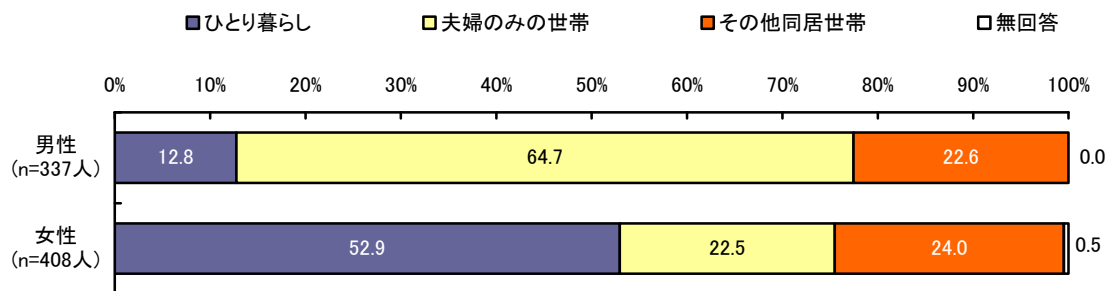
世帯形態については「夫婦のみの世帯」が42.0%で最も多く、次いで「ひとり暮らし」が34.5%、「その他同居世帯」が23.2%と続いている。

これを性別にみると、男性は「夫婦のみの世帯」が多くなっているのに対し、女性は「ひとり暮らし」の割合が高くなっており、男性と女性で大きく異なっている。

図表8 世帯形態



図表9 性別にみた世帯形態



④ 経済的なゆとりの状況

問7 現在の暮らしの状況を経済的にみてどう感じていますか。(1つ)

「普通」が64.6%

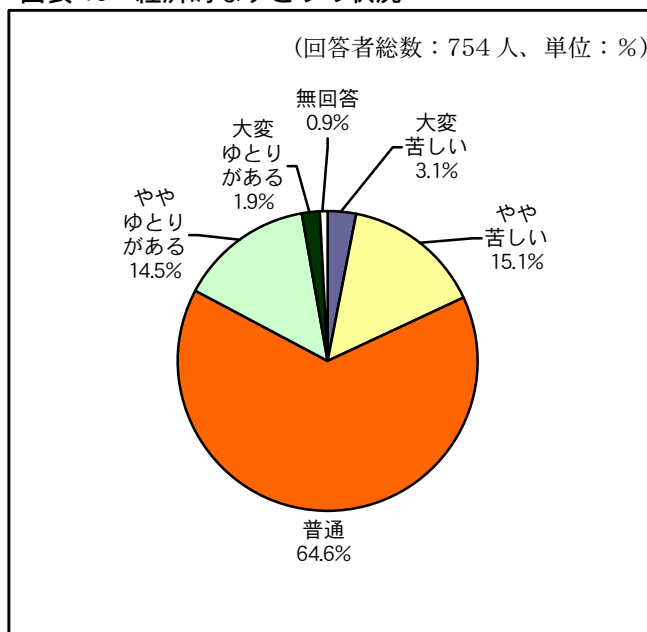
経済的なゆとりの状況については「普通」が64.6%を占めている。

また、「大変苦しい」が3.1%、「やや苦しい」が15.1%で、これらを合わせると18.2%が「苦しい」と回答している。

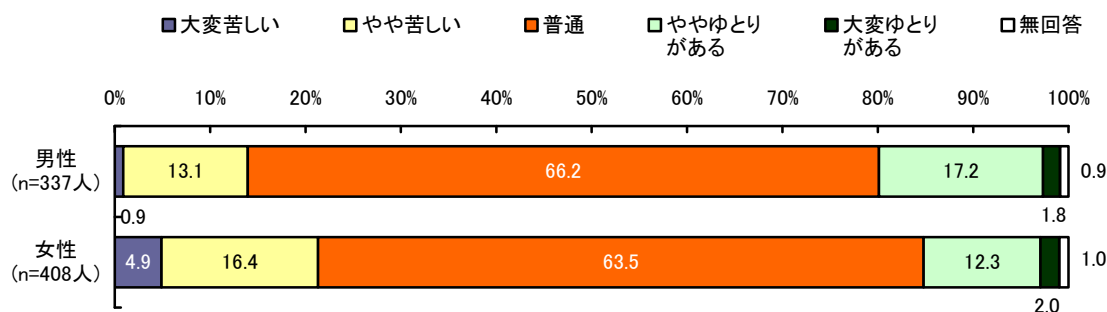
一方、「ややゆとりがある」が14.5%、「大変ゆとりがある」が1.9%で、これらを合わせると16.4%が「ゆとりがある」と回答している。

これを性別にみると、女性は男性に比べて「大変苦しい」の割合がやや高く、「ややゆとりがある」の割合がやや低い。

図表 10 経済的なゆとりの状況

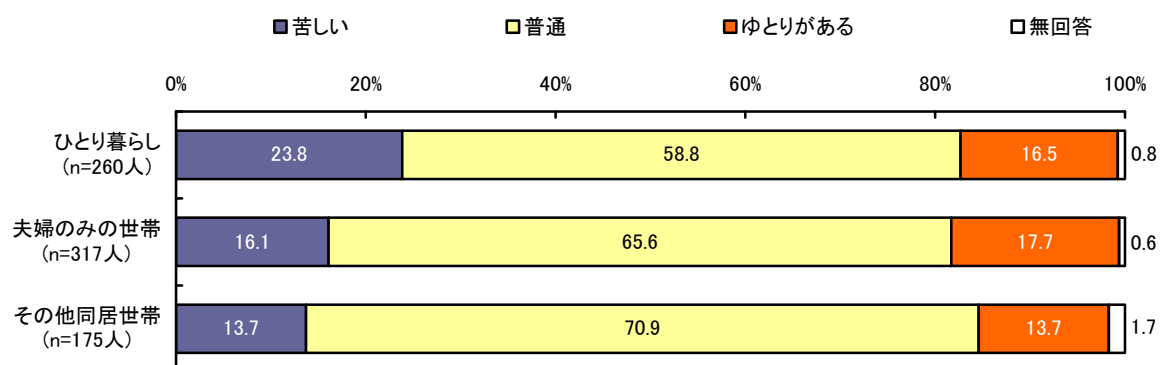


図表 11 性別にみた経済的なゆとりの状況



これを世帯形態別にみると、ひとり暮らしは他の回答者に比べ、「苦しい」の割合が高い。

図表 12 世帯形態別にみた経済的なゆとりの状況



⑤ 現在の健康状態

問35 あなたの現在の健康状態は、いかがですか。(1つ)

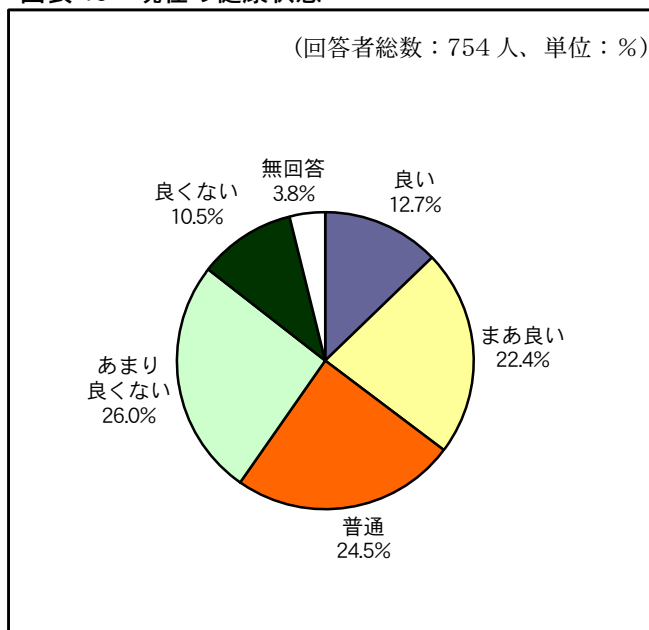
“良い・まあ良い”と“あまり良くない・良くない”がほぼ同数

現在の健康状態については「良い」が12.7%、「まあ良い」が22.4%であり、これらを合わせると35.1%が“良い・まあ良い”と回答している。

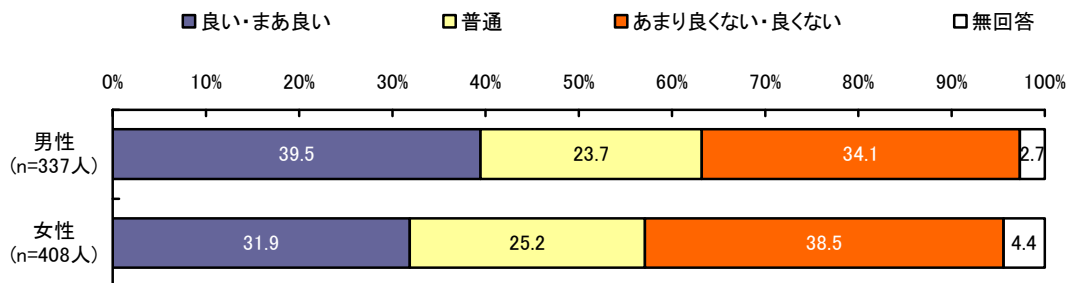
一方、「あまり良くない」が26.0%、「良くない」が10.5%であり、これらを合わせると36.5%が“あまり良くない・良くない”と回答している。

これを性別にみると、男性は女性に比べ、“良い・まあ良い”の割合が高い。

図表 13 現在の健康状態

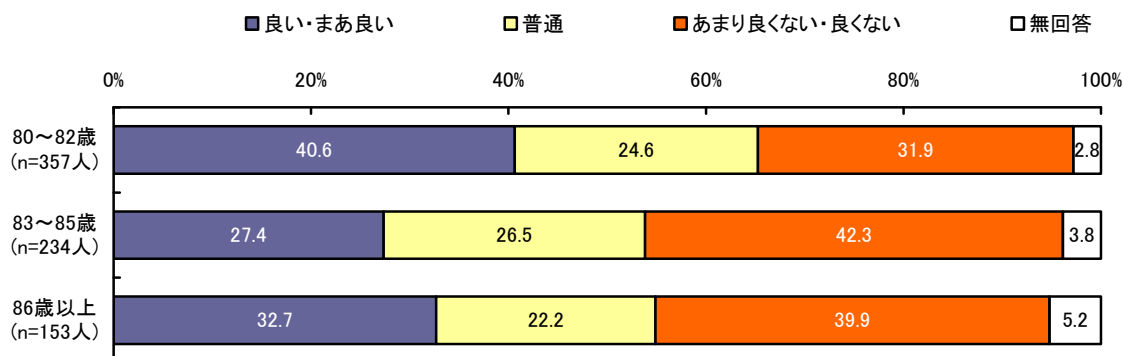


図表 14 性別にみた現在の健康状態



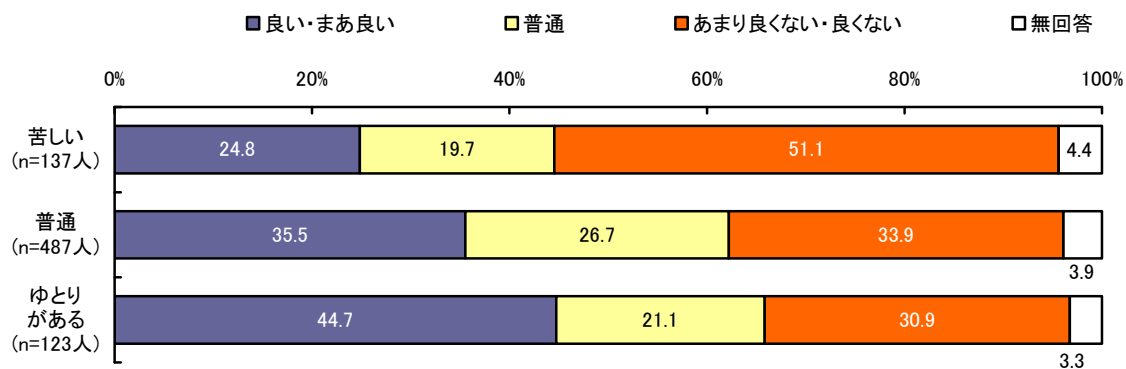
これを年齢別にみると、“良い・まあ良い”の割合は80～82歳から83～85歳にかけ、減少するものの、年齢層による傾向はみられない。

図表 15 年齢別にみた現在の健康状態



これを経済的なゆとりの状況別にみると、ゆとりがある人ほど“良い・まあ良い”の割合が高くなる傾向がみられる。

図表 16 経済的なゆとりの状況別にみた現在の健康状態



(2) 活動に関する状況

① 若いときに考えていた高齢期の過ごし方

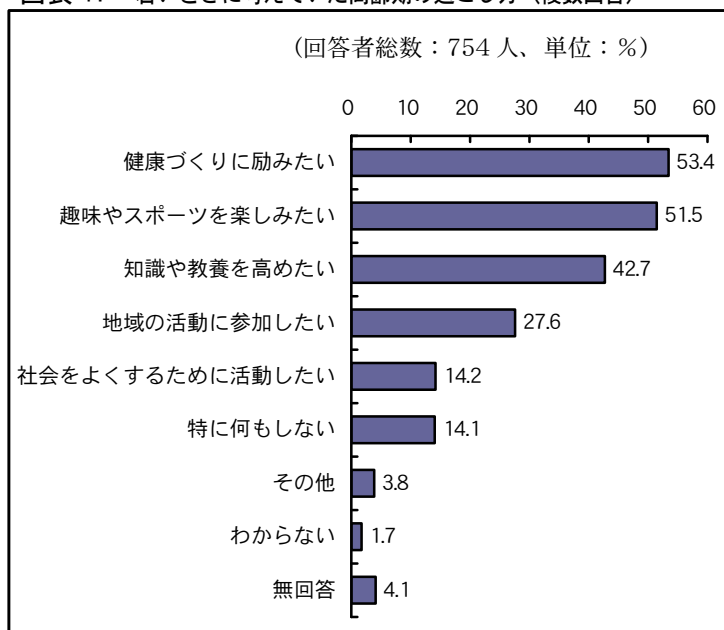
問19 あなたは高齢期を迎える前、高齢期を主にどのようにして過ごしたいと考えていましたか。(主なものを3つまで)

**「健康づくり」や「趣味やスポーツ」、
「知識や教養」が多くみられる**

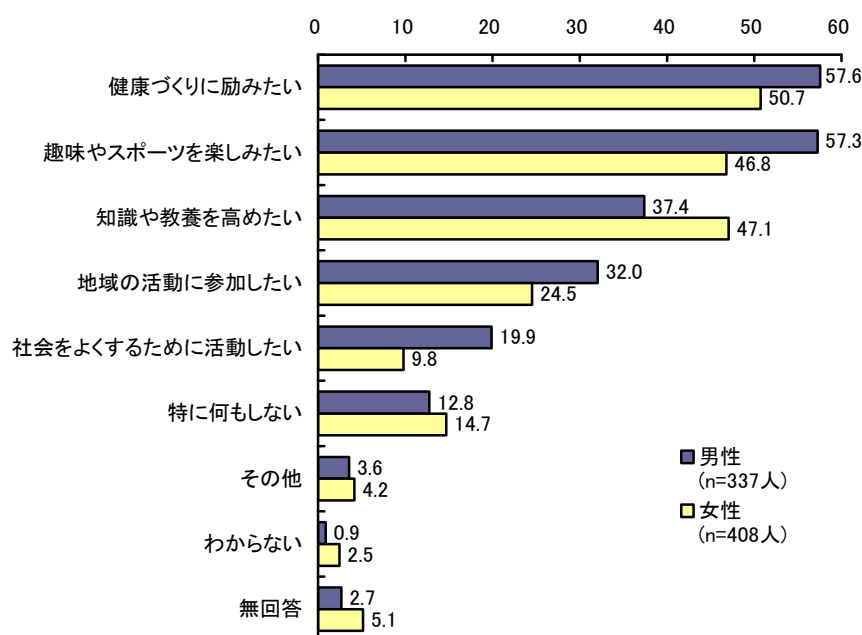
若いときに考えていた高齢期の過ごし方については「健康づくりに励みたい」が53.4%で最も多く、次いで「趣味やスポーツを楽しみたい」が51.5%、「知識や教養を高めたい」が42.7%と続いている。

これを性別にみると、男性は「健康づくりに励みたい」や「趣味やスポーツを楽しみたい」、「地域の活動に参加したい」、「社会をよくするために活動したい」の割合が女性に比べて高い。一方、女性は「知識や教養を高めたい」の割合が男性に比べ、高くなっている。

図表 17 若いときに考えていた高齢期の過ごし方 (複数回答)



図表 18 性別にみた若いときに考えていた高齢期の過ごし方 (複数回答)



② この1年間の団体等への参加状況

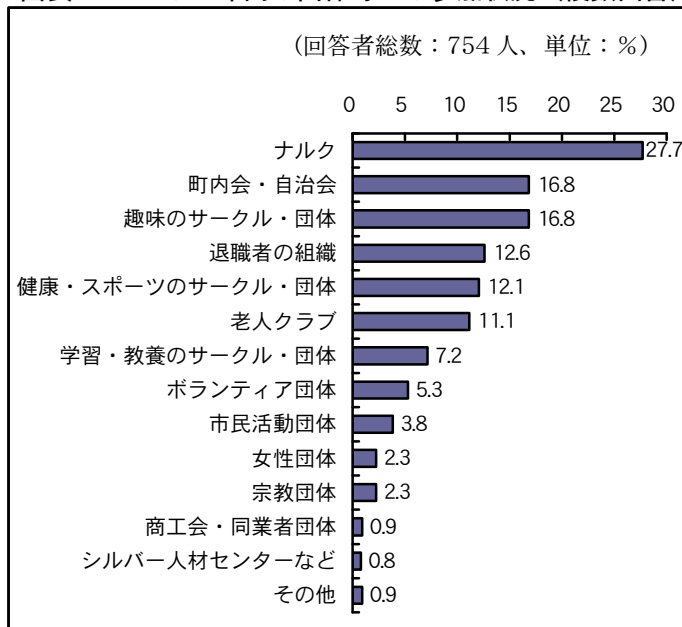
問20 あなたは、参加している団体や組織がありましたか。それはどのような団体でしたか。この1年、5年前ごろ、10年前ごろ、15年前ごろについて、それぞれいくつでもお答えください。(それぞれいくつでも○)

「ナルク」が最も多い

この1年間の団体等への参加状況については「ナルク」が27.7%で最も多く、次いで「町内会・自治会」および「趣味のサークル・団体」がともに16.8%で続いている。これは、本調査がナルク会員を対象にしていることが影響しているものと思われる。

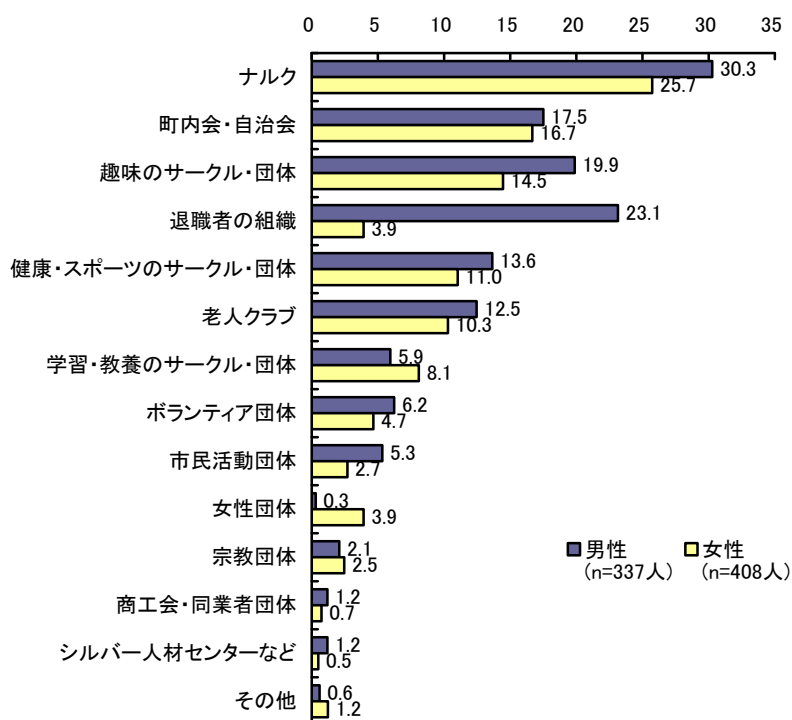
これを性別にみると、男性は女性に比べて「ナルク」、「趣味のサークル・団体」、「退職者の組織」などの割合が高い。一方、女性は男性に比べ、「学習・教養のサークル・団体」、「女性団体」の割合が高くなっており、男女による差がみられる。

図表 19 この1年間の団体等への参加状況（複数回答）



※グラフは無回答(50.0%)を省略して表示した。

図表 20 性別にみたこの1年間の団体等への参加状況（複数回答）



③ 団体や組織での現在の役割

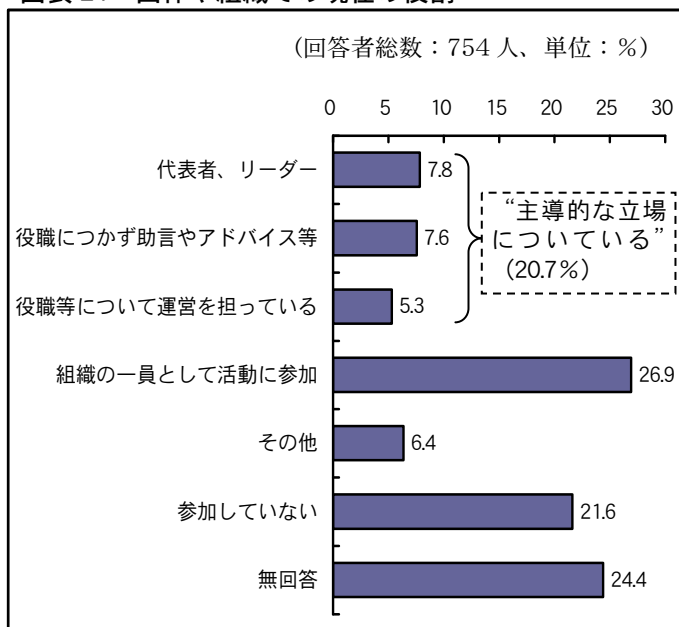
問21 あなたが現在、最も力を入れて活動をしている団体や組織で、次のどのような役割を担っていますか。(1つ)

“主導的な立場についている” が20.7%

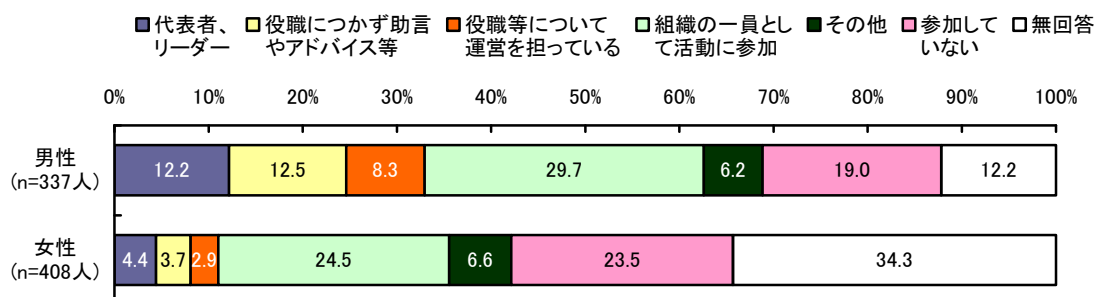
団体や組織での現在の役割については「代表者、リーダー」が7.8%、「役職につかず助言やアドバイス等」が7.6%、「役職等について運営を担っている」が5.3%で、これらを合わせると20.7%が“主導的な立場についている”と回答している。※本調査はナルク会員を対象としており、「団体や組織にまったく参加していない」は、回答者がナルクへの帰属意識を有していないことを想定した選択肢である。

これを性別にみると、男性は女性に比べ、“主導的な立場についている”の割合が高い。

図表 21 団体や組織での現在の役割

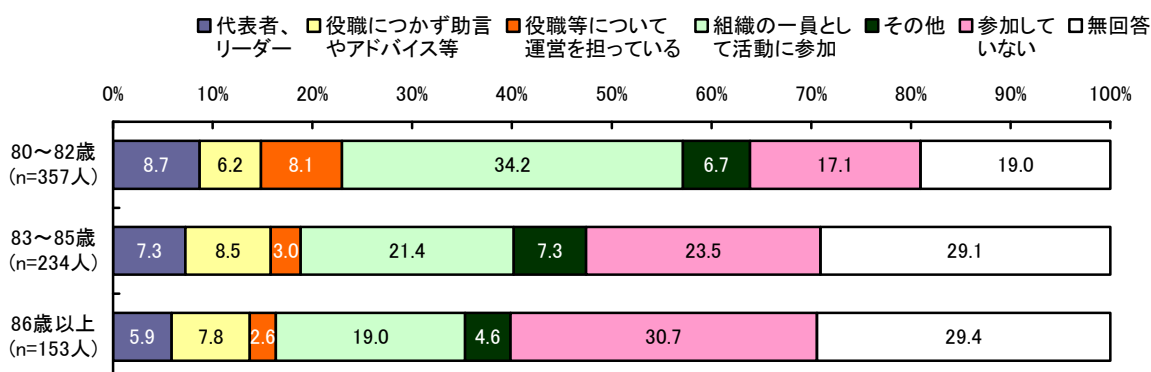


図表 22 性別にみた団体や組織での現在の役割



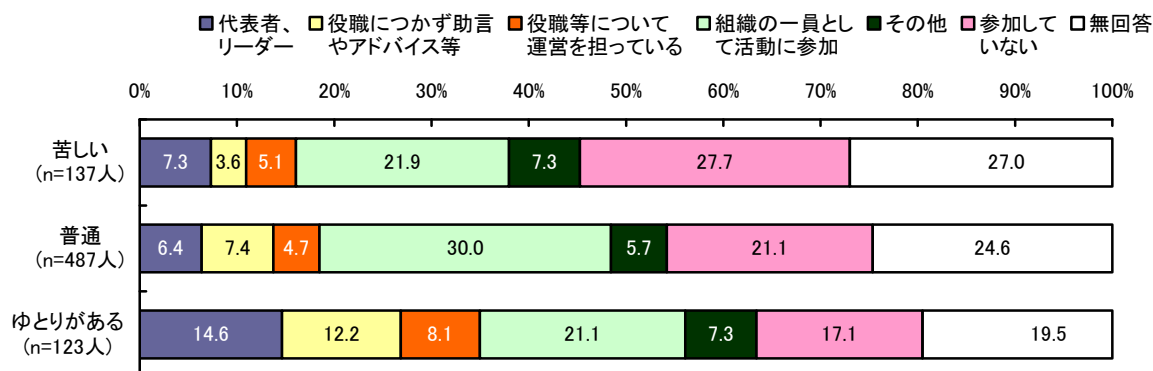
これを年齢別にみると、年齢が高くなるに従い、「組織の一員として活動に参加」の割合が低くなる傾向がみられる。これに対し、“主導的な立場についている”の割合は年齢層の違いによる差がみられない。

図表 23 年齢別にみた団体や組織での現在の役割



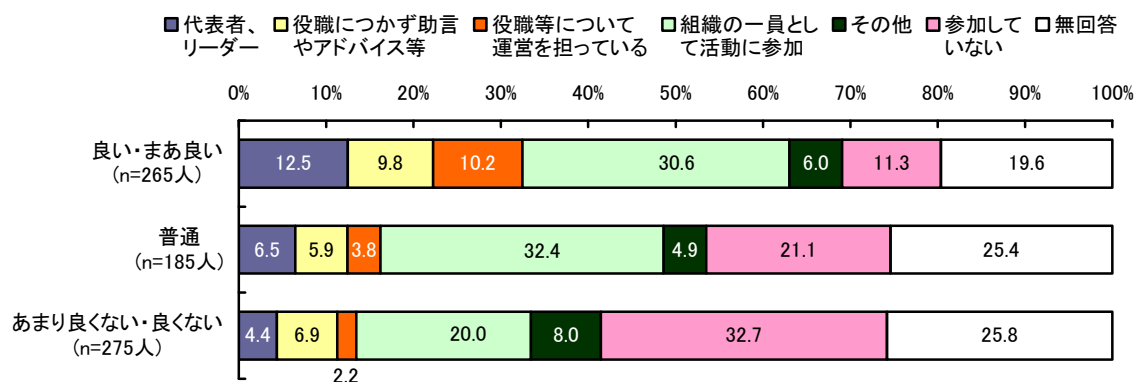
これを経済的なゆとりの状況別にみると、ゆとりがある人は他の回答者に比べ、“主導的な立場についている”の割合が高くなっている。

図表 24 経済的なゆとりの状況別にみた団体や組織での現在の役割



これを健康状態別にみると、“主導的な立場についている”の割合は、健康状態が良い・まあ良い状態である人とその他の回答者で大きく差が生じている。

図表 25 健康状態別にみた団体や組織での現在の役割



④ 活動への参加頻度

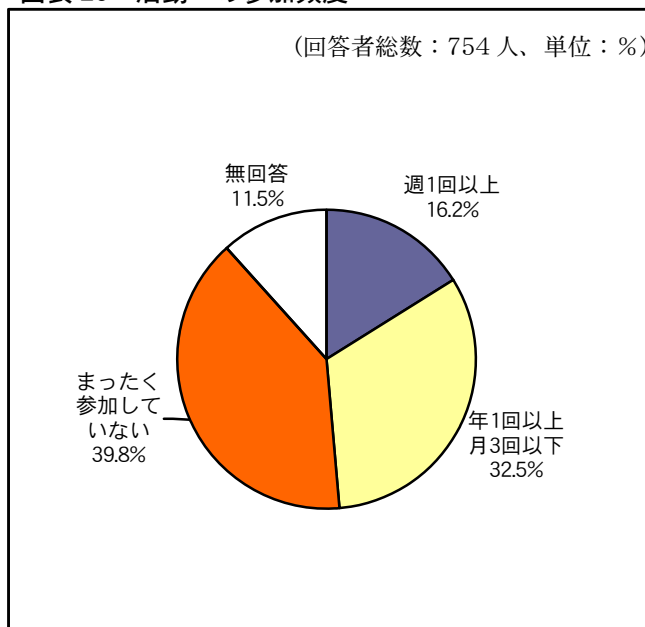
問23 あなたは、「ボランティア活動や地域活動」（自分のための趣味活動・スポーツ・仕事は除く、以下同じ）全般にこの1年はどのくらいの頻度で参加しましたか。（1つ）

「年1回以上月3回以下」が32.5%

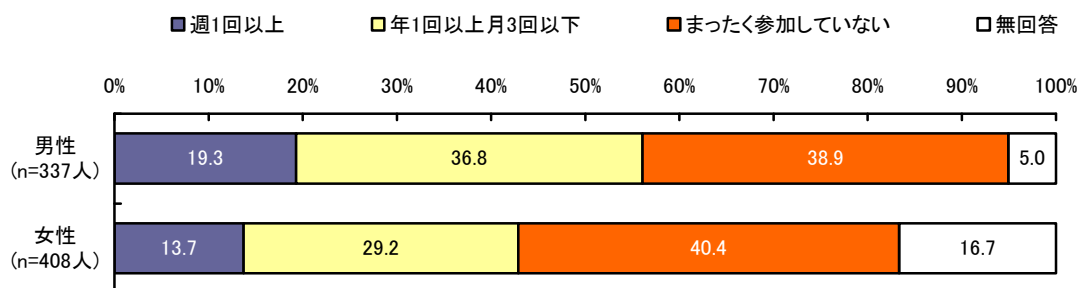
活動への参加頻度については「週1回以上」が16.2%、「年1回以上月3回以下」が32.5%、「まったく参加していない」が39.8%となっている。

これを性別にみると、男性は女性に比べて「週1回以上」および「年1回以上月3回以下」の割合が高くなっている。

図表26 活動への参加頻度

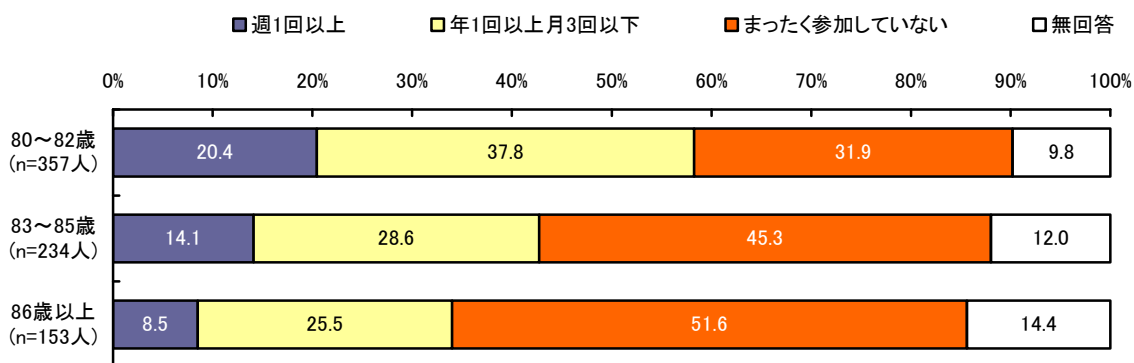


図表27 性別にみた活動への参加頻度



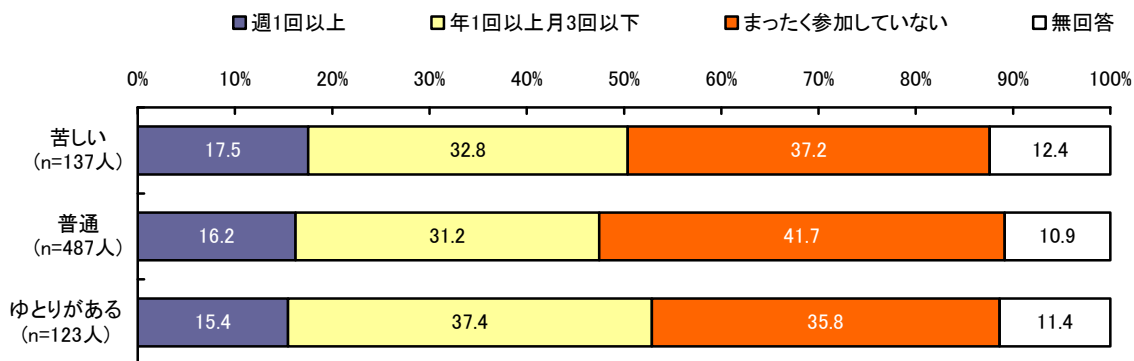
これを年齢別にみると、年齢層が高くなるほど「週1回以上」および「年1回以上月3回以下」の割合が低くなっている。

図表28 年齢別にみた活動への参加頻度



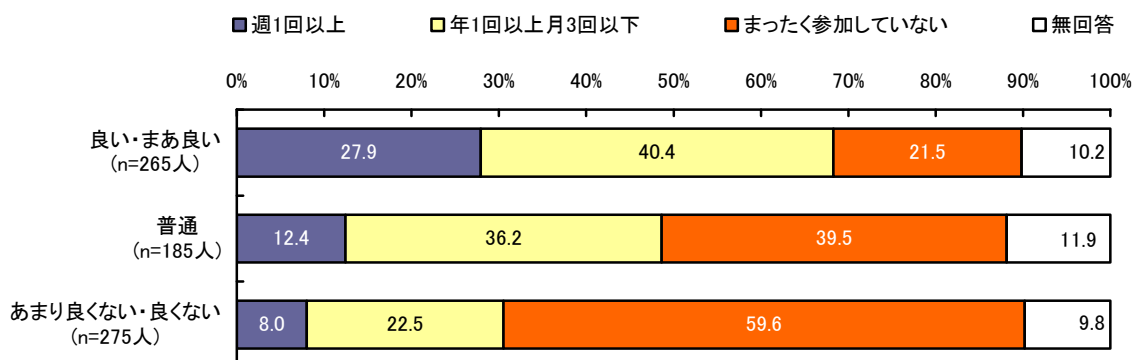
これを経済的なゆとりの状況別にみると、とくに差はみられない。

図表 29 経済的なゆとりの状況別にみた活動への参加頻度



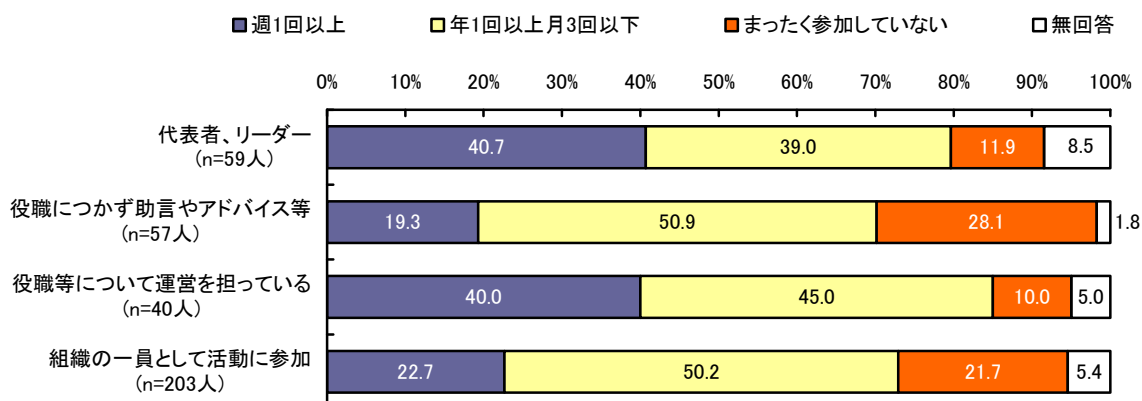
これを健康状態別にみると、「週1回以上」は健康状態が良い・まあ良いとする回答者において比較的多くみられる。

図表 30 健康状態別にみた活動への参加頻度



これを団体や組織での役割別にみると、代表者、リーダーおよび役職等について運営を担っている回答者は他の回答者に比べ、「週1回以上」の割合が高く、役割による活動頻度の違いが顕著となっている。

図表 31 団体や組織での役割別にみた活動への参加頻度



⑤ 活動に参加している理由

問27 あなたが、現在「ボランティア活動や地域活動」に参加している主な理由は何ですか。(主なもの3つまで)

「人と交流できるから」が最も多い

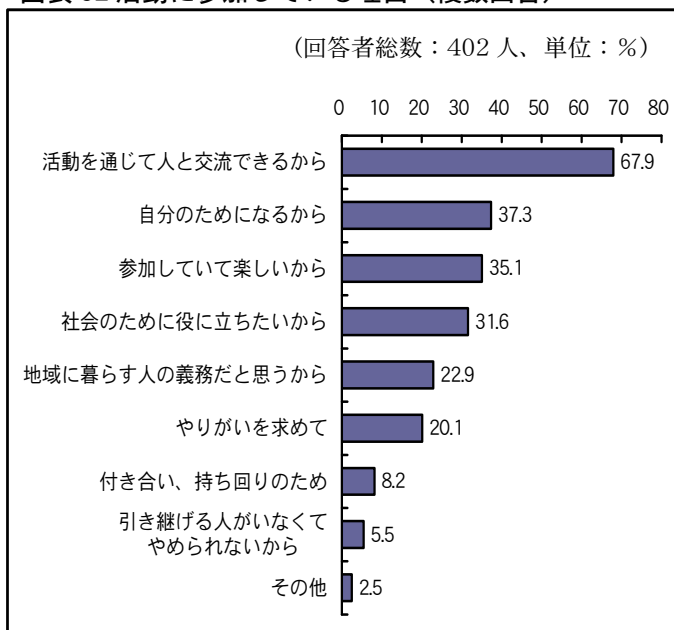
活動に参加している理由については「活動を通じて人と交流できるから」が67.9%で、他の項目に比べてとくに多くなっている。

次いで多かった項目は「自分のためになるから」が37.3%、「参加していて楽しいから」が35.1%などとなっている。

これを性別にみると、「活動を通じて人と交流できるから」は男性・女性ともにほぼ同じ割合となっている

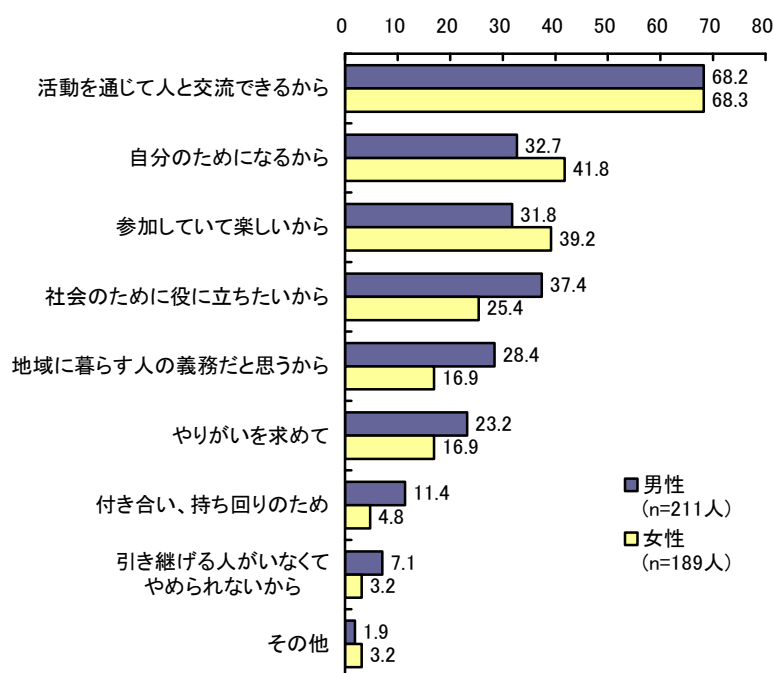
一方、男性は女性に比べ、「社会のために役立ちたいから」や「地域に暮らす人の義務だと思うから」などの社会的な理由の割合が高く、女性は男性に比べ、「自分のためになるから」や「参加していて楽しいから」といった個人的な理由の割合が高くなっている。

図表 32 活動に参加している理由（複数回答）



※構成比は、回答者総数から「活動に参加していない」(244人)および無回答(108人)を除く402人を基数として算出した。

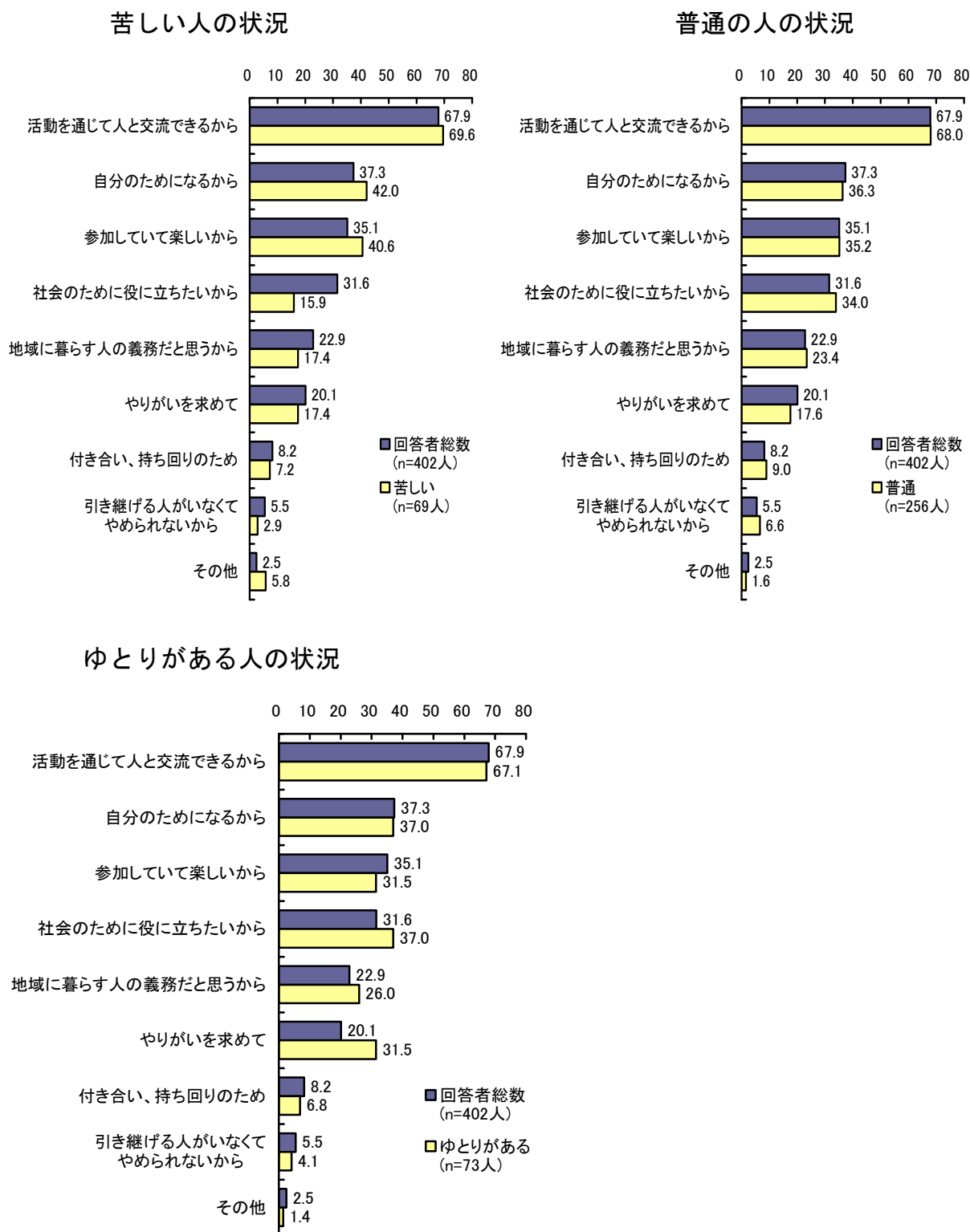
図表 33 性別にみた活動に参加している理由（複数回答）



これを経済的なゆとりの状況別にみると、経済的に苦しい人では「社会のために役に立ちたいから」の割合が15.9%であるのに対し、ゆとりがある人では37.0%と大きな差がみられた。

一方、ゆとりがある人は他の回答者に比べ、「やりがいを求めて」の割合が高い。

図表 34 経済的なゆとりの状況別にみた活動に参加している理由（複数回答）



⑥ 約 10 年間における活動頻度の変化

問29 あなたは、この10年ぐらいの間に、参加していた「ボランティア活動や地域活動」全般の活動頻度はどのように変わりましたか。(1つ)

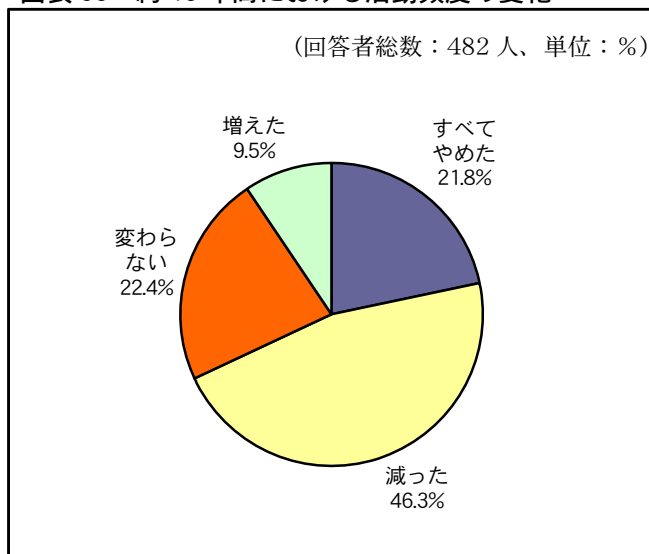
“変わらないまたは増えた”が31.9%

約10年間における活動頻度の変化については「すべてやめた」が21.8%、「減った」が46.3%であり、これらを合わせると68.1%が“やめたもしくは減った”と回答している。

一方、「変わらない」が22.4%、「増えた」が9.5%であり、これらを合わせると31.9%が“変わらないまたは増えた”と回答している。

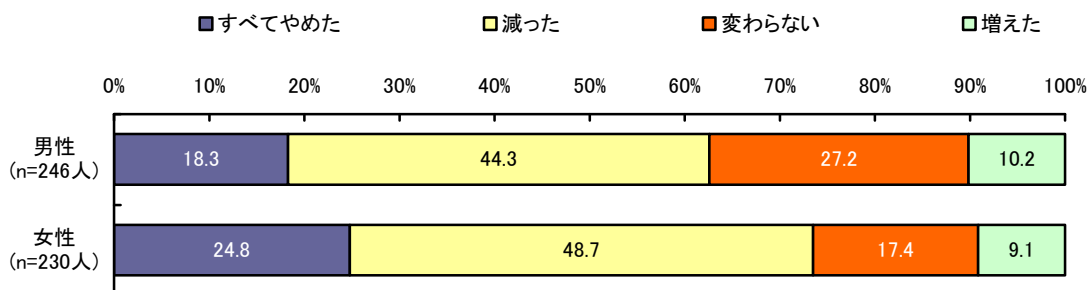
これを性別にみると、男性は女性に比べて「変わらない」の割合が高く、女性は男性に比べ、“やめたもしくは減った”の割合が高い。

図表 35 約 10 年間における活動頻度の変化



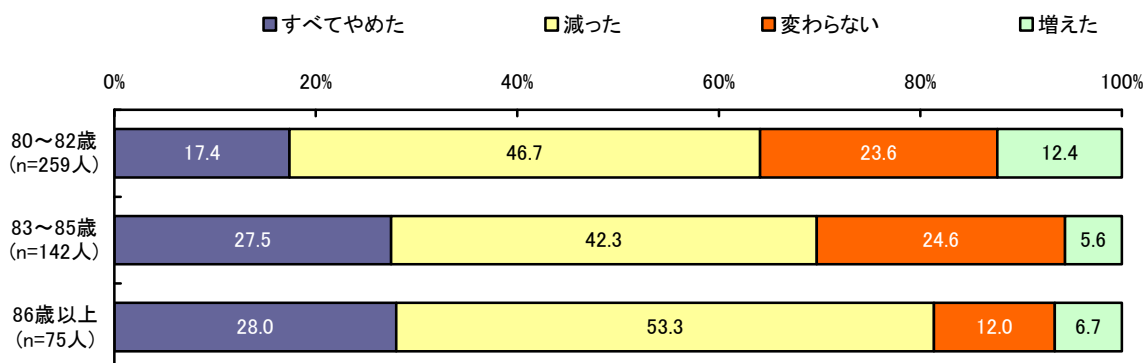
※構成比は、回答者総数から「参加していない」(128人)および無回答(144人)を除く482人を基数として算出した。

図表 36 性別にみた約 10 年間における活動頻度の変化



これを年齢別にみると、“やめたもしくは減った”の割合は年齢が高くなるに従い、増加する傾向がみられる。

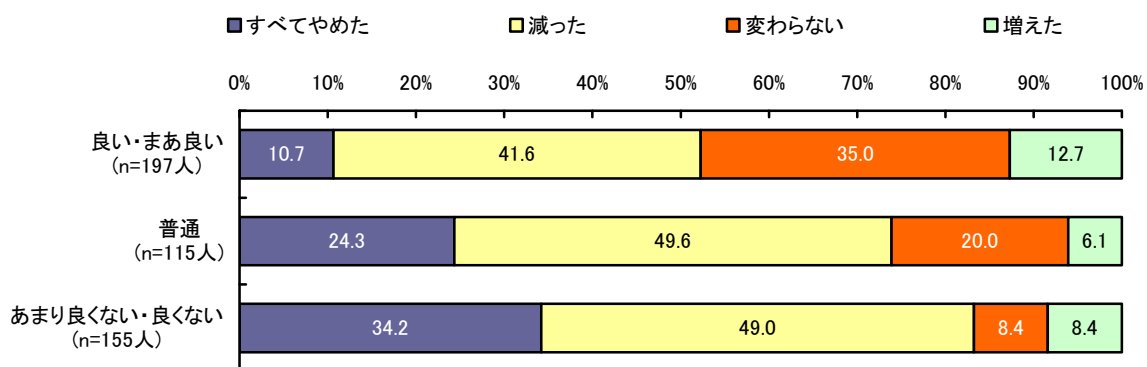
図表 37 年齢別にみた約 10 年間における活動頻度の変化



これを健康状態別にみると、全体的には健康状態が良い人ほど「すべてやめた」の割合が低くなり、「変わらない」の割合が高くなる傾向にある。

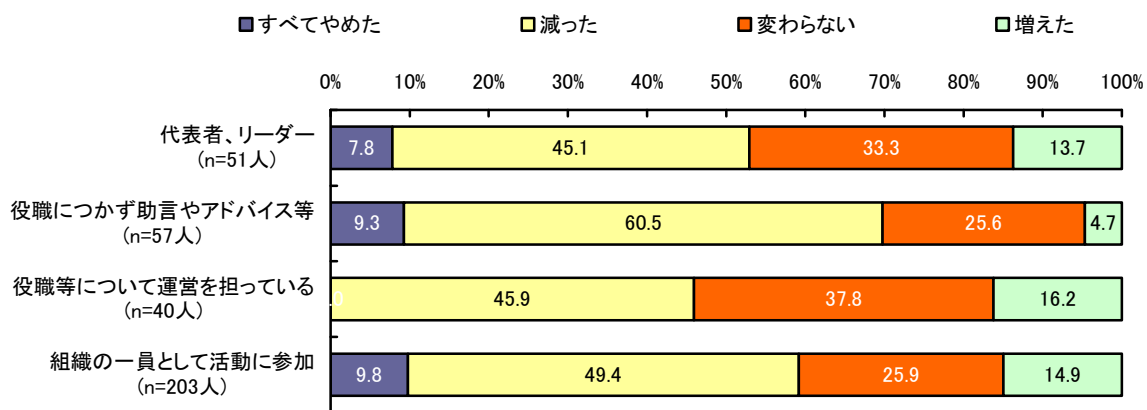
また、健康状態が良い・まあ良い人と普通の人では“変わらないまたは増えた”の差が大きくなっており、活動頻度を維持するためには良好な健康状態が大切であることがうかがえる。

図表 38 健康状態別にみた約 10 年間における活動頻度の変化



これを団体や組織での役割別にみると、代表者、リーダーや役職等について運営を担っている人は他の回答者に比べ、“やめたもしくは減った”の割合が低い。

図表 39 現在の役職別にみた約 10 年間における活動頻度の変化



(3) 生きがい・幸福感の状況

① 近所づきあいの状況

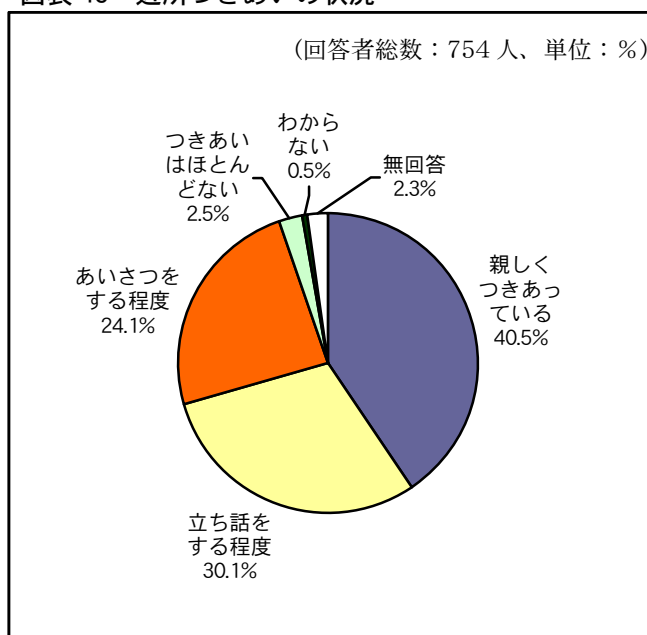
問16 あなたは、ふだん、近所の人とどの程度のつきあいをしていますか。(1つ)

「親しくつきあっている」が40.5%

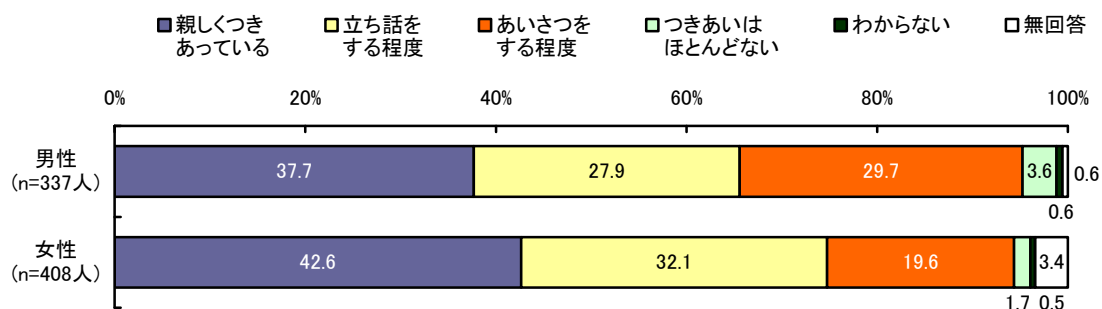
近所づきあいの状況については「親しくつきあっている」が40.5%で最も多く、次いで「立ち話をする程度」が30.1%、「あいさつをする程度」が24.1%となっている。

これを性別にみると、女性は男性に比べ「親しくつきあっている」の割合がやや高くなっているものの、顕著な差はみられない。

図表 40 近所づきあいの状況

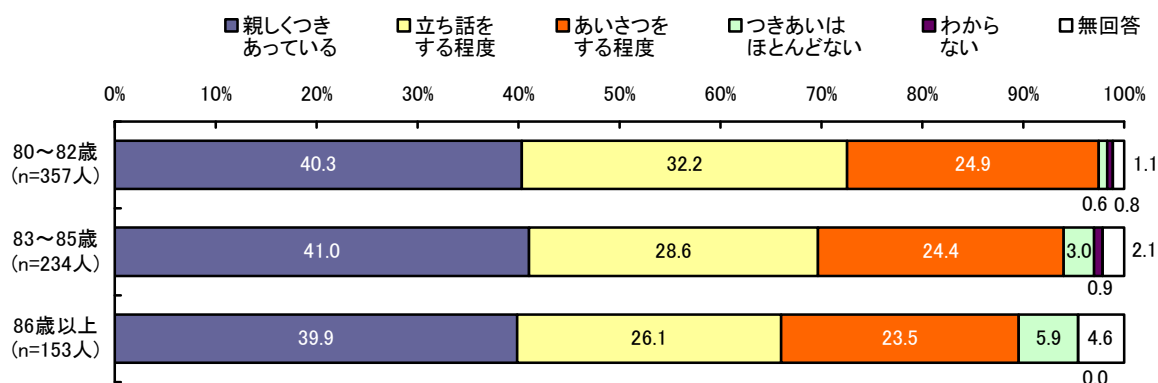


図表 41 性別にみた近所づきあいの状況



年齢別では年齢層が高くなるに従い、「つきあいはほとんどない」の割合がわずかに高くなる傾向がみられるが、顕著な傾向ではない。

図表 42 年齢別にみた近所づきあいの状況



② 相談相手の有無

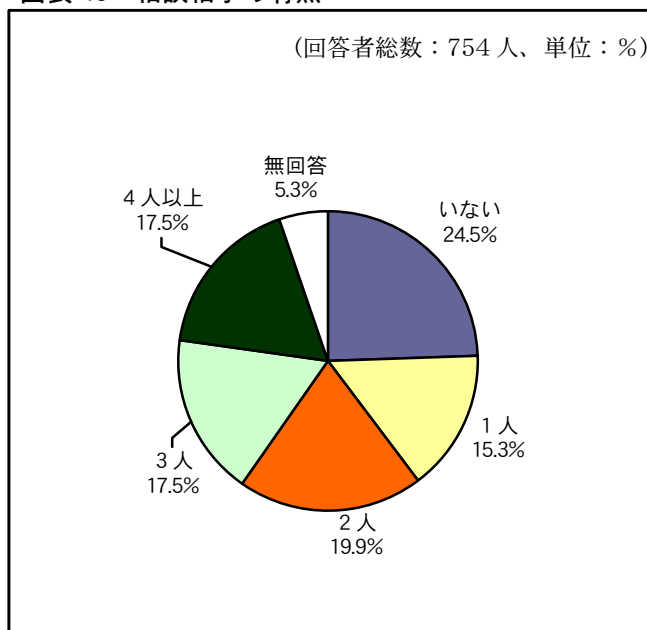
問18 あなたは、悩みや愚痴を話せる人がいますか。また、何人いますか。

“相談相手がいる”は70.2%

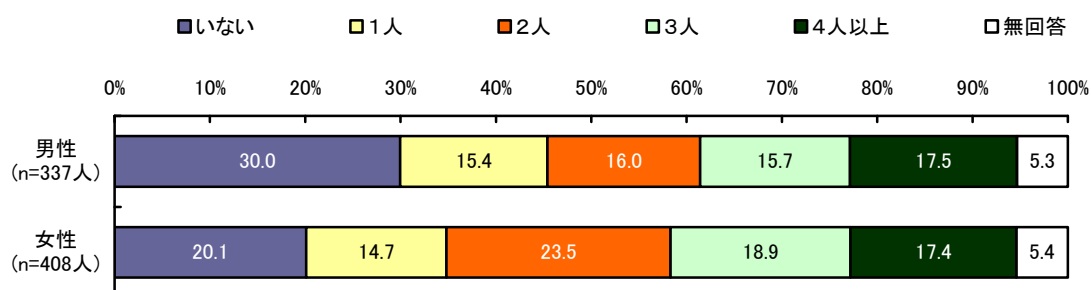
相談相手の有無については「いない」が24.5%となっている。一方、1人以上の相談相手がいる回答者は合わせて70.2%となっている。

これを性別にみると、男性は女性に比べ、「いない」の割合が高い。

図表 43 相談相手の有無

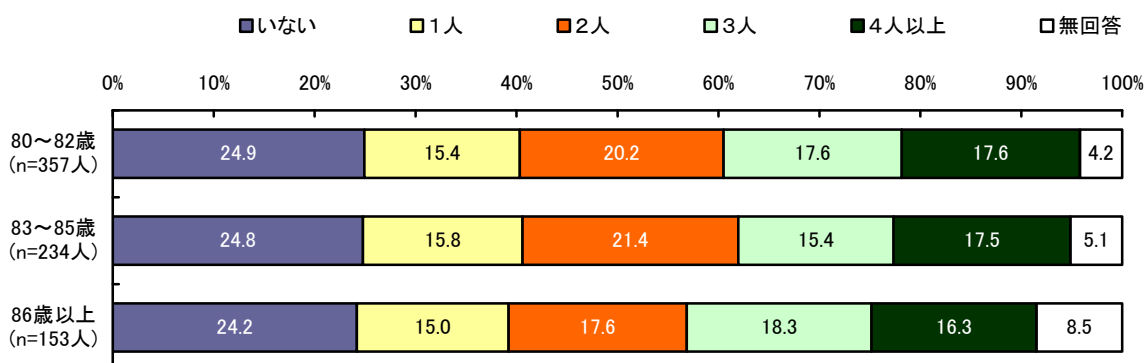


図表 44 性別にみた相談相手の有無



これを年齢別にみると、目立った差はみられない。

図表 45 年齢別にみた相談相手の有無



③ 生きがいの有無

問38 あなたは、現在、どの程度生きがい（喜びや楽しみ）を感じていますか。（1つ）

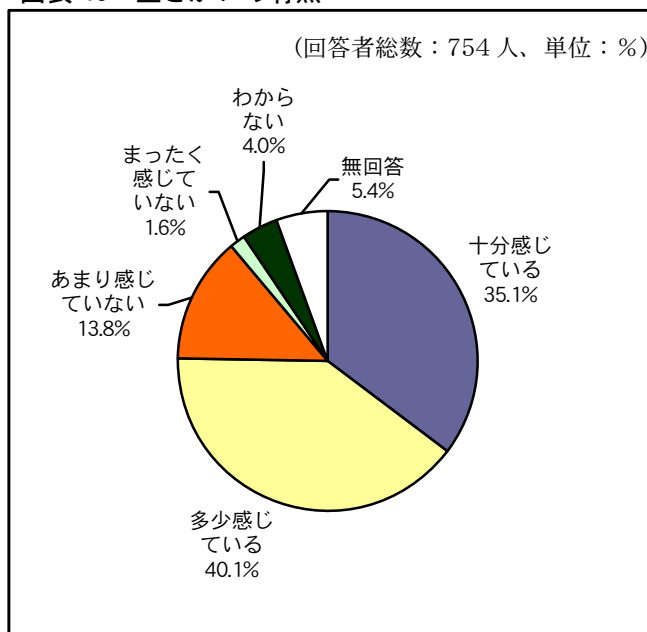
“感じている”が75.2%

生きがいの有無については「十分感じている」が35.1%、「多少感じている」が40.1%であり、これらを合わせると75.2%が“感じている”と回答している。

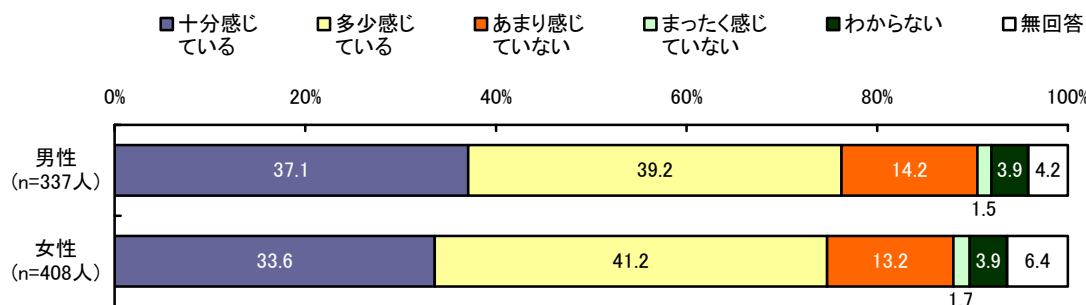
一方、「あまり感じていない」が13.8%、「まったく感じていない」が1.6%であり、これらを合わせると15.4%が“感じていない”と回答している。

これを性別にみると、目立った差はみられない。

図表 46 生きがいの有無

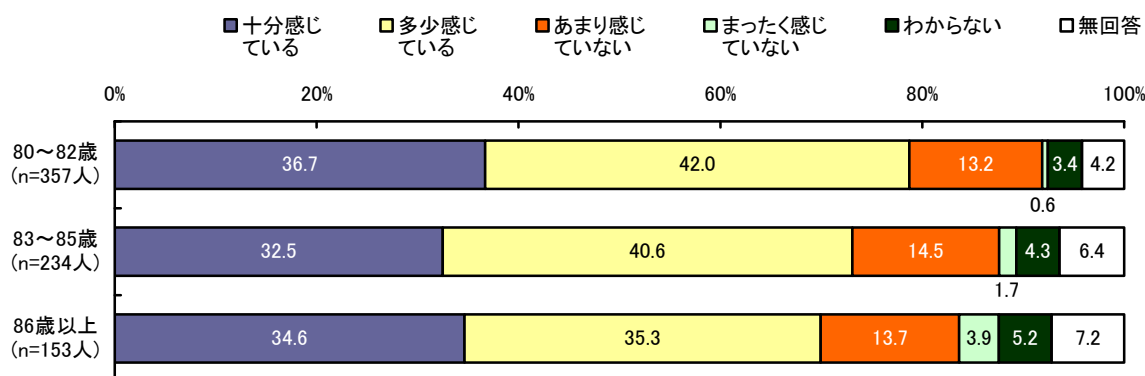


図表 47 性別にみた生きがいの有無



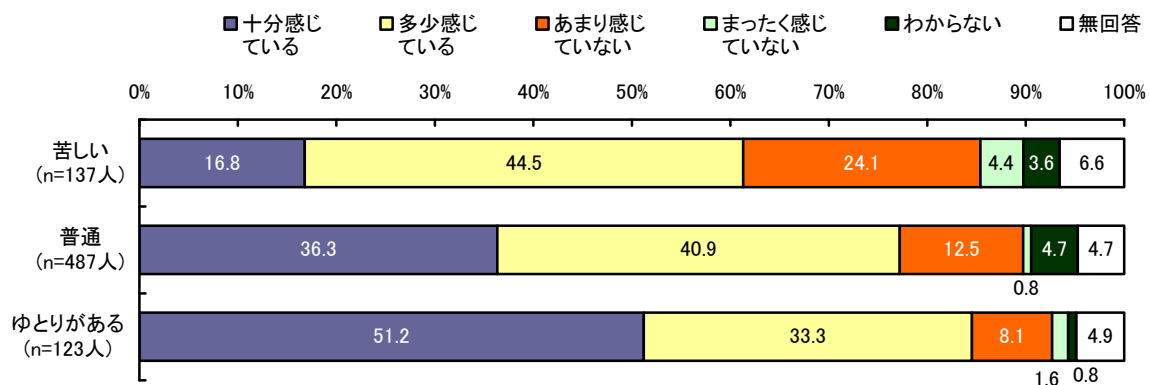
これを年齢別にみると、年齢層が高くなるに従い、“感じている”の割合がわずかながら減少する傾向がみられる。

図表 48 年齢別にみた生きがいの有無



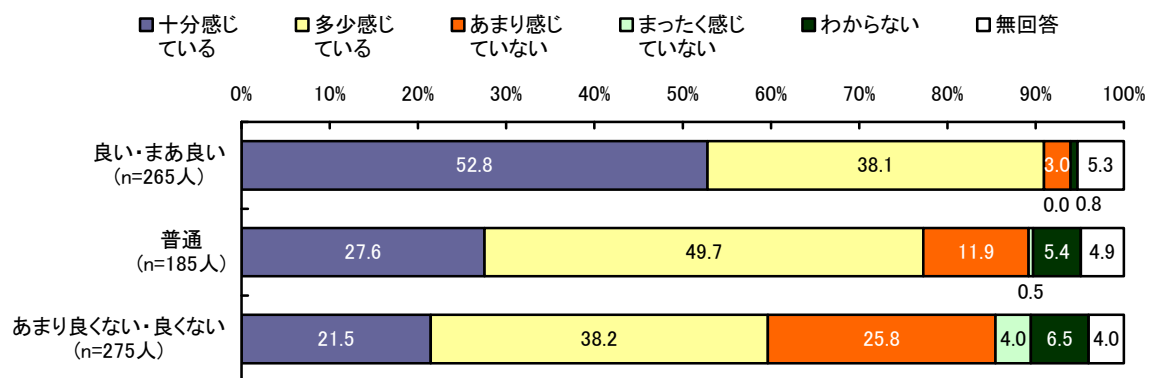
これを経済的なゆとりの状況別にみると、ゆとりがある人ほど「十分感じている」の割合が高くなり、「あまり感じていない」の割合が低くなる傾向が顕著である。

図表 49 経済的なゆとりの状況別にみた生きがいの有無



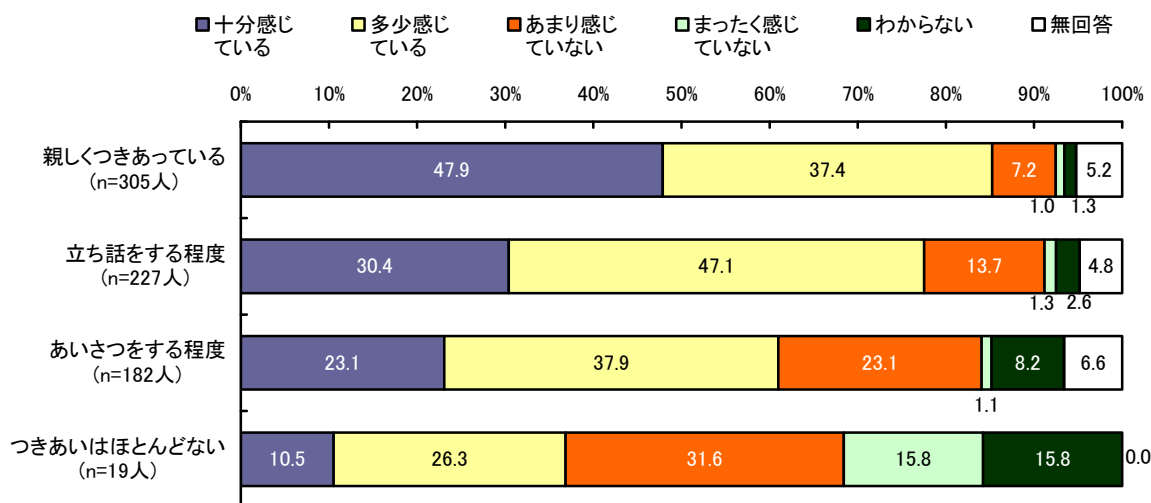
これを健康状態別にみると、健康状態が良好な人ほど「十分感じている」の割合が高くなり、「あまり感じていない」の割合が低くなっている。

図表 50 健康状態別にみた生きがいの有無



これを近所づきあい別にみると、親しくつきあっている人ほど「十分感じている」の割合が高くなり、「あまり感じていない」の割合が低くなる傾向が顕著にみられる。

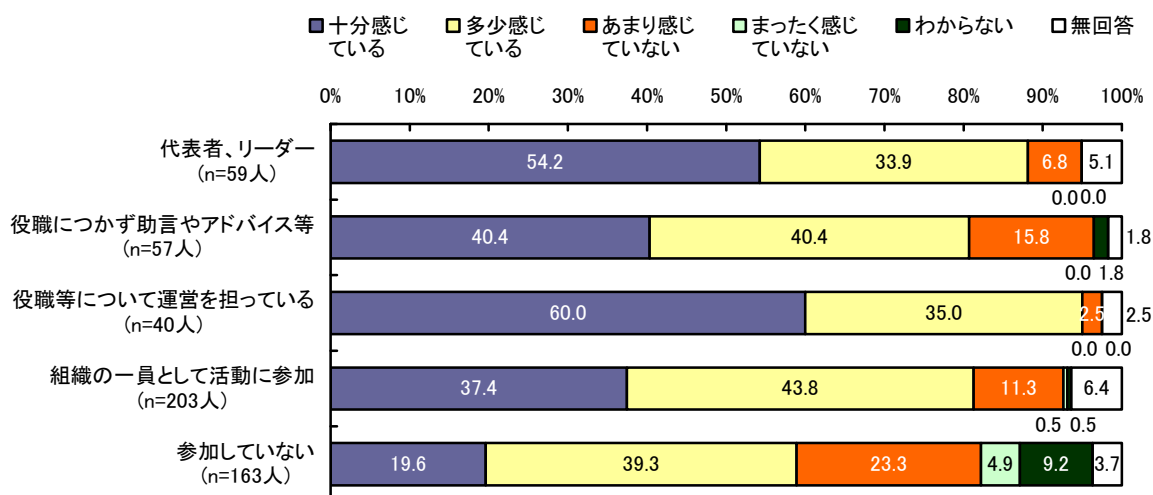
図表 51 近所づきあい別にみた生きがいの有無



これを団体や組織での役割別にみると、代表者、リーダーや役職等について運営を担っている人は他の回答者に比べて「十分感じている」の割合が高い。

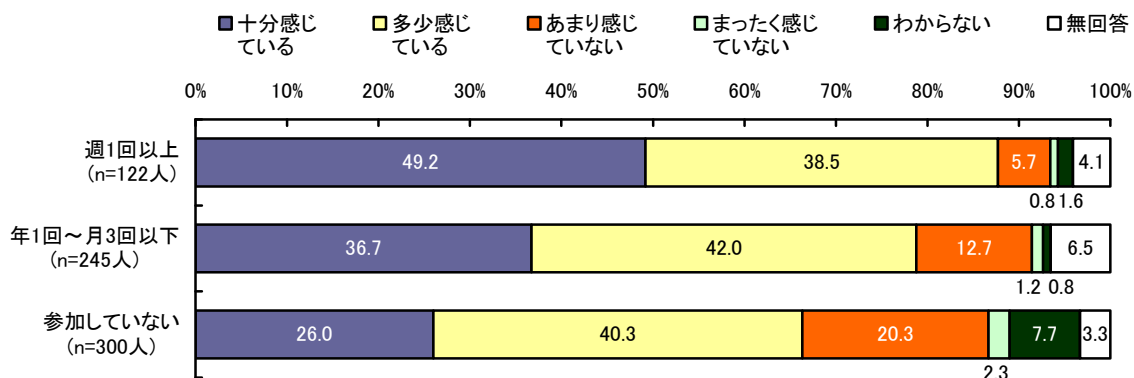
一方、団体や組織に参加していないと回答した人は他の回答者に比べ、「十分感じている」の割合が低く、「あまり感じていない」の割合が高い。

図表 52 団体や組織での役割別にみた生きがいの有無



これを活動への参加頻度別にみると、活動頻度が高い人ほど「十分感じている」の割合が高くなり、「あまり感じていない」の割合が低くなる。

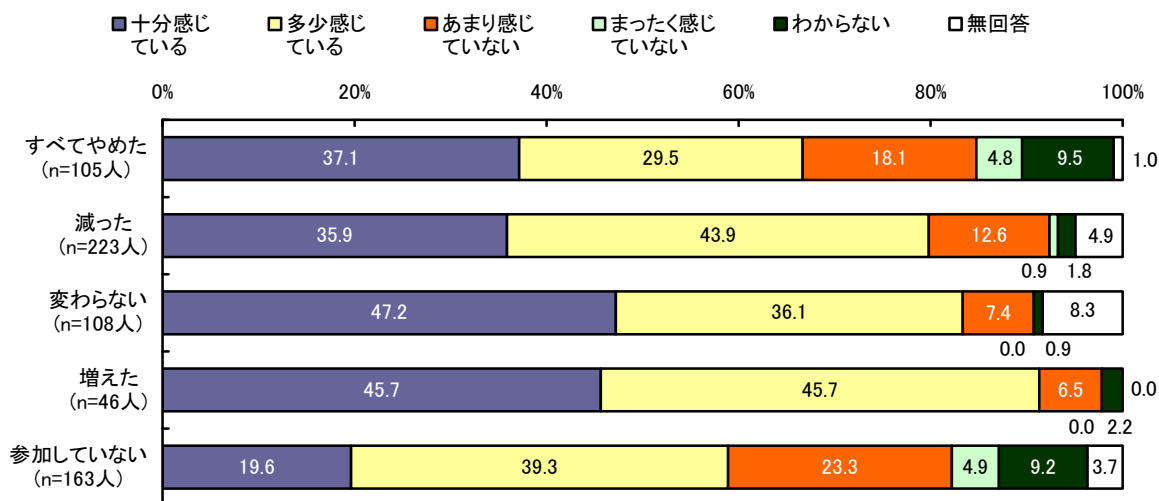
図表 53 活動への参加頻度別にみた生きがいの有無



これを活動頻度の変化別にみると、活動頻度が変わらない、または増えた人は他の回答者に比べ、「十分感じている」の割合が高い。

一方、参加していない人は他の回答者に比べて「十分感じている」の割合が低く、「あまり感じていない」の割合が高い。

図表 54 活動頻度の変化別にみた生きがいの有無



④ 幸福感

問41 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけ○で囲んでください。(1つ)

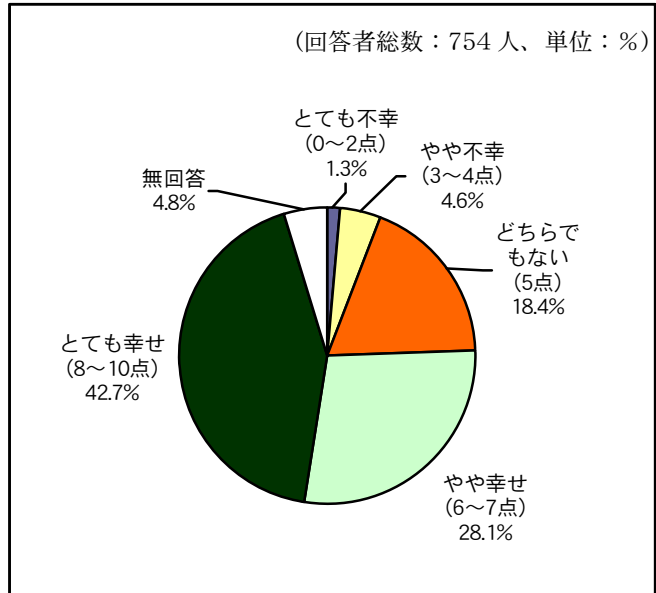
70.8%が“幸せ”

幸福感は「とても幸せ(8~10点)」が42.7%で最も多く、次いで「やや幸せ(6~7点)」が28.1%が続いている。また、これらを合わせると70.8%が“幸せ”と回答している。

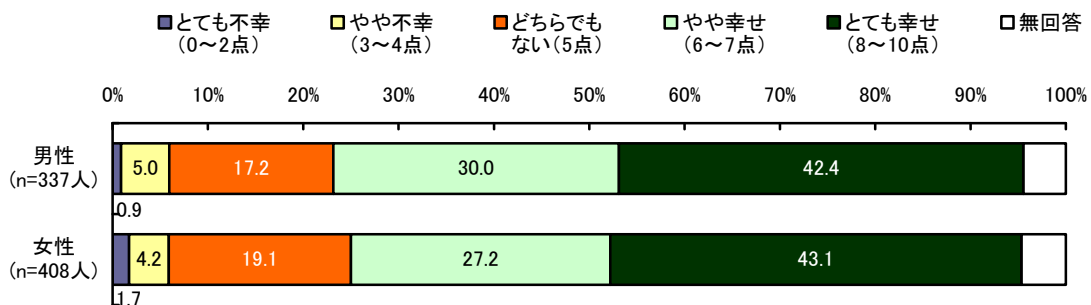
なお、全体の平均値は7.01点である。

これを性別にみると、顕著な差はみられない。

図表 55 幸福感

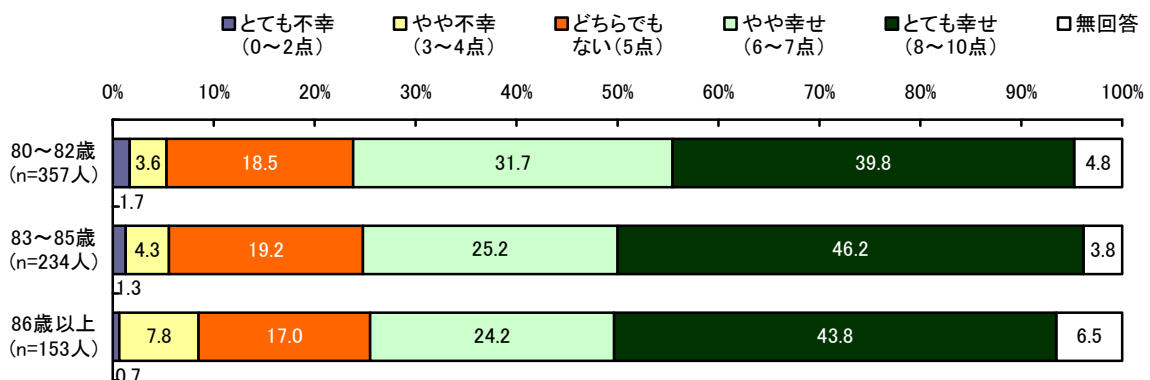


図表 56 性別にみた幸福感



また、年齢別では80~82歳から83~85歳にかけ、「やや幸せ(6~7点)」が減少し「とても幸せ(8~10点)」の割合が高くなっているが、著しい差はみられない。

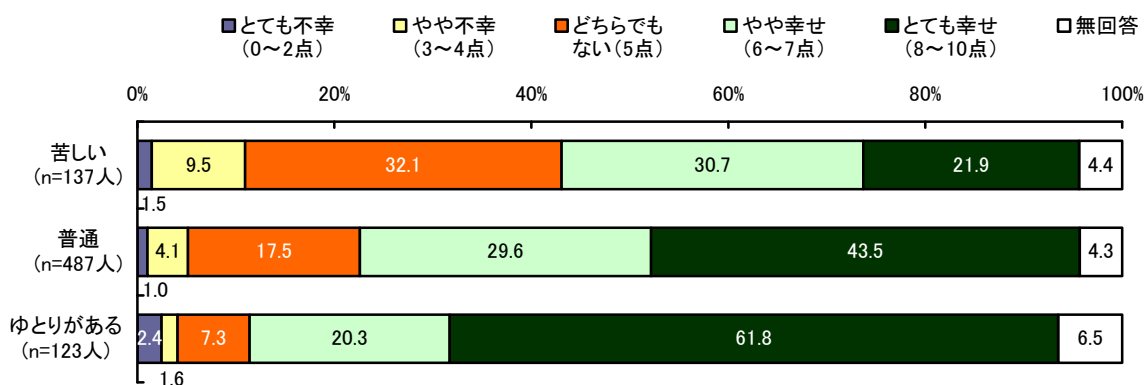
図表 57 年齢別にみた幸福感



これを経済的なゆとりの状況別にみると、ゆとりがある人ほど「とても幸せ（8～10点）」の割合が高くなり、「どちらでもない（5点）」の割合が低くなる。

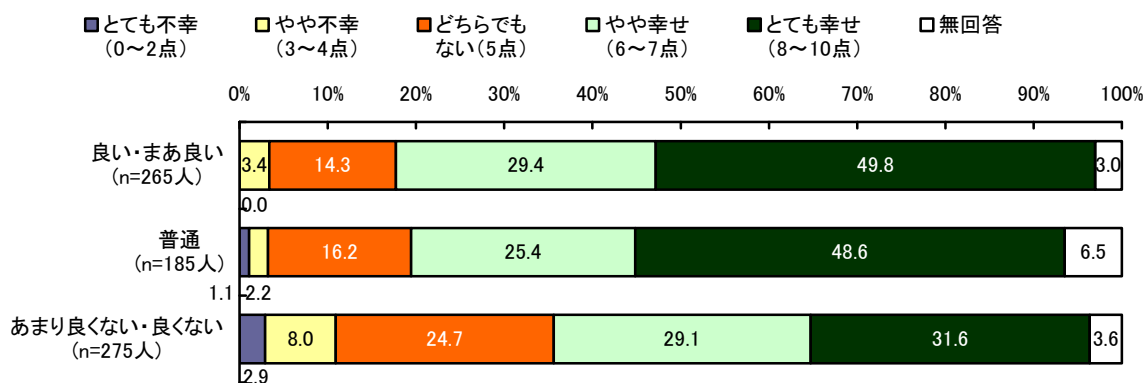
一方、“不幸”の割合に着目すると、経済的に苦しい人は他の回答者に比べてやや多くなっているが、普通の人とゆとりのある人では差がみられない。

図表 58 経済的なゆとりの状況別にみた幸福感



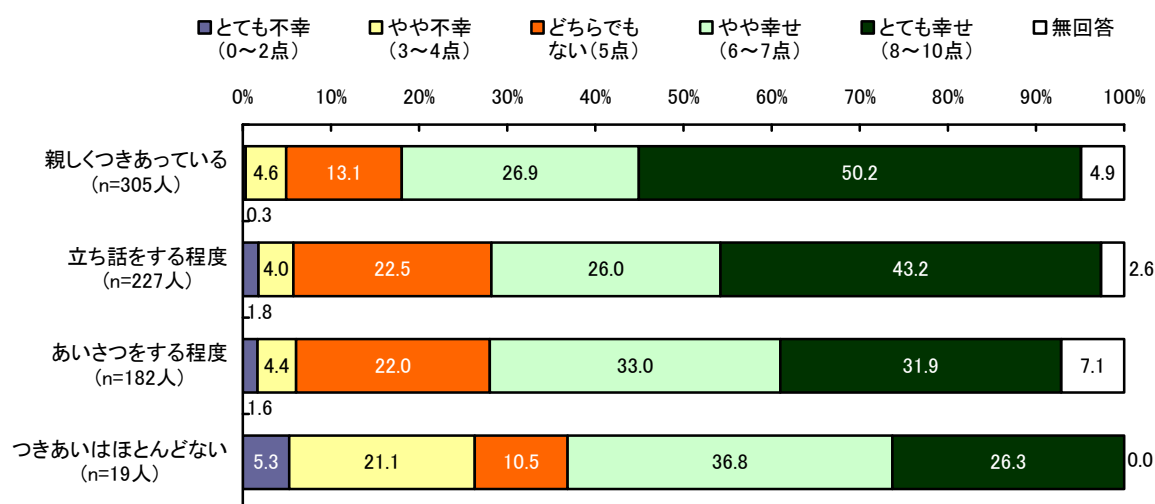
これを健康状態別にみると、健康状態が良くない人は他の回答者に比べ、「とても幸せ（8～10点）」の割合が低く、「どちらでもない（5点）」の割合が高い。

図表 59 健康状態別にみた幸福感



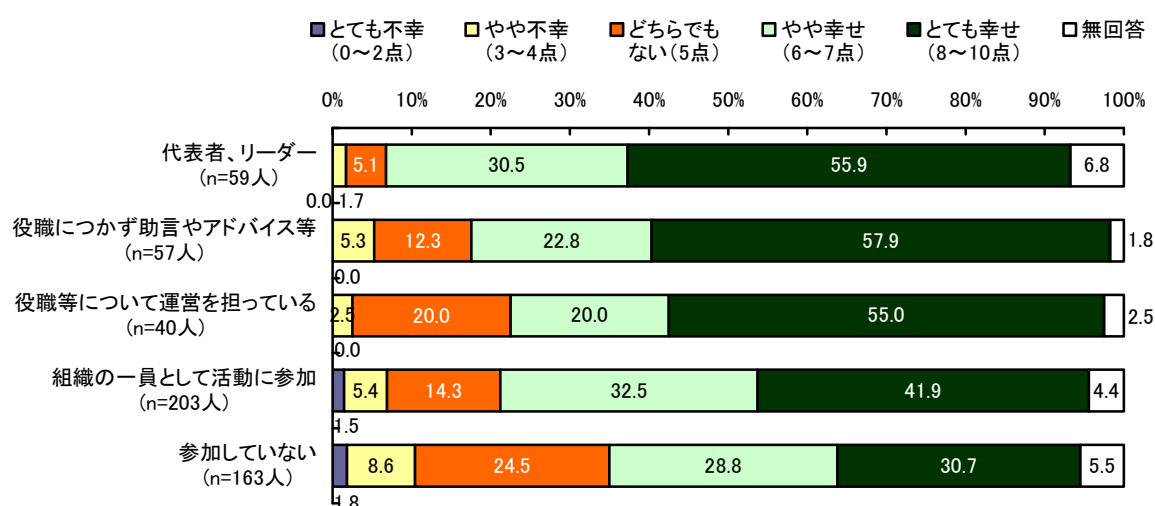
近所づきあい別では、親しくつきあっている人ほど「とても幸せ（8～10点）」の割合が高くなる傾向がみられる。

図表 60 近所づきあい別にみた幸福感



これを団体や組織での役割別にみると、代表者、リーダー、役職につかず助言やアドバイス等をする人および役職等について運営を担っている人は他の回答者に比べ、「とても幸せ（8～10点）」の割合が高い。

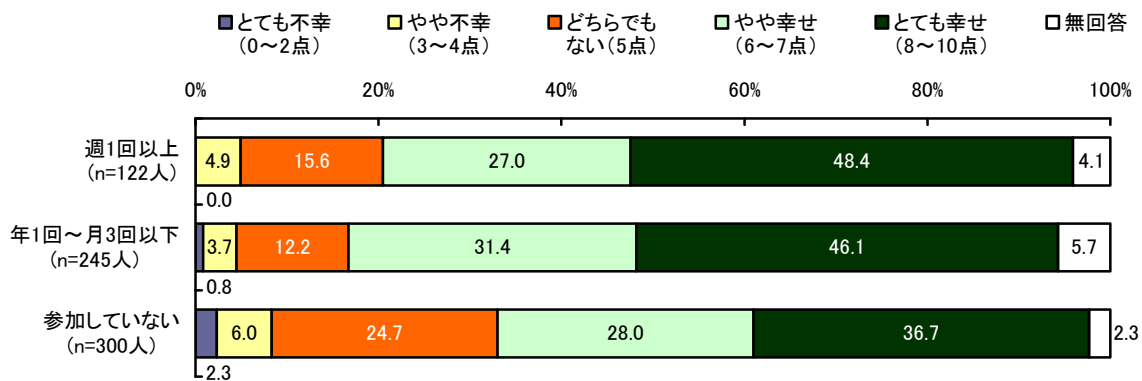
図表 61 団体や組織での役割別にみた幸福感



これを活動への参加頻度別にみると、参加していない人は参加している回答者に比べ、「とても幸せ（8～10点）」の割合が低い。

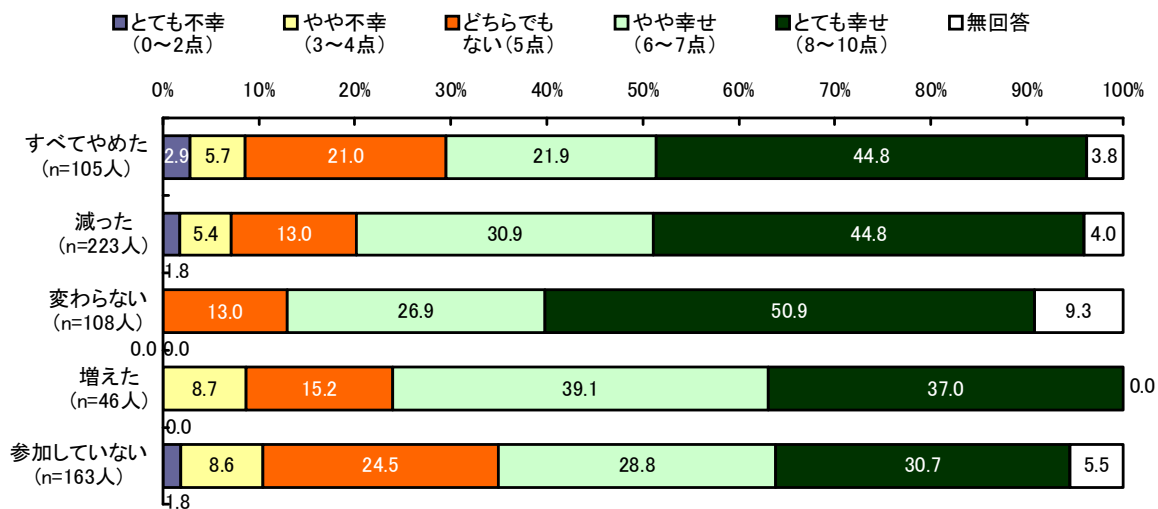
一方、参加している人のなかでは活動頻度による差はみられない。

図表 62 活動への参加頻度別にみた幸福感



これを活動頻度の変化別にみると、属性による差はみられるものの、一定の傾向はみられない。

図表 63 活動頻度の変化別にみた幸福感



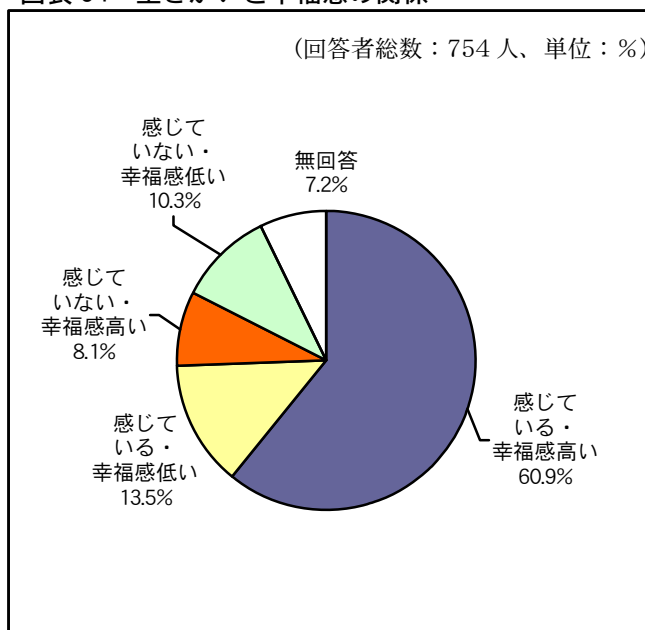
⑤ 生きがいと幸福感の関係

生きがいと幸福感が一致しない人が2割程度みられた

問 38 および問 41 をもとに、生きがいと幸福感の関係を調べた。

その結果、生きがいを感じているものの幸福感が低い(13.5%)、あるいは生きがいは感じていないものの、幸福感が高い(8.1%)と回答した人が合わせて21.6%となっている。

図表 64 生きがいと幸福感の関係



図表 65 生きがい・幸福感 4 区分のマトリックス

		生きがい ←————→	
		感じている	感じていない
幸福感	高い	① 生きがいを感じている 幸福感も高い 60.9%	③ 生きがいは感じていない 幸福感は高い 8.1%
	低い	② 生きがいを感じている 幸福感は低い 13.5%	④ 生きがいを感じていない 幸福感も低い 10.3%

図表 66 分類の考え方

設問	区分	選択肢の内容
生きがい (問 35)	感じている	「十分感じている」、「感じている」
	感じていない	「あまり感じていない」、「まったく感じていない」
幸福感 (問 41)	高い	6点以上 (中央値 5.0 より高い)
	低い	5点以下 (中央値 5.0 以下)

3. まとめ

これまでみてきた調査結果について、「健康」、「経済」、「こころ（生きがい）」、「家族」および「交流」の5Kの視点から整理する。

① 健康

〔調査対象者の健康状態¹⁾〕

現在の健康状態（図表 13）では、“良い・まあ良い”が35.1%で、“普通”が24.5%、“あまり良くない・良くない”が36.5%と、三者がほぼ均等に分布している。これは活動的な80歳代の高齢者を擁するナルクの会員を対象としているからだと考えられる。

今回の調査では調査対象者の健康状態は分析対象ではなく、次に示すように健康状態の違いが80歳代の高齢者の活動状況や生きがいにどのように影響するかを分析するため、用いている。そうした点からは健康状態が均等に分布している状況は分析に適しているといえる。

また、年齢別による健康状態の分布の違いがみられなかったことも特徴である（図表 15）。このことは加齢による活動状況の変化などをみる際、健康による影響を捨象できる点で好ましい。

〔健康状態と活動状況〕

健康状態別にみた活動への参加頻度（図表 30）において、健康状態が良好な人では活動が「週1回以上」の割合は27.9%であったが、普通の人では12.4%と半分の水準にとどまっている。

また、健康状態別にみた団体や組織での現在の役割（図表 25）において、“主導的な役割についている”の割合は健康状態が良好な人では合わせて32.5%であるのに対し、健康状態が普通の人では16.2%と半分の水準にとどまっている。

こうしたことから、80歳代の高齢者の活動を支える基盤として良好な健康状態が不可欠であるものの、それは「普通」と感じる健康状態ではなく、明確に「健康である」と自覚するほどに積極的な状態であることが大切なことが明らかとなった。このため、政策的課題としては病気や障害がない状態をめざす健康づくりではなく、自ら健康を感じることができるほどに積極的な健康づくり政策が求められよう。

〔健康と生きがい・幸福感〕

生きがいや幸福感と健康状態との関係については、健康状態は生きがいについて強い相関を示した（図表 50）のに対し、幸福感については健康状態が良好な人と普通の人での違いがみられなかった（図表 59）。

このことから80歳代の高齢者の健康状態と生きがいの関連は強いものの、健康状態と幸福感との関連は必ずしも強くないことが明らかとなった。

¹⁾ 回答者の健康状態を客観的に測る指標は存在しないため、本調査では回答者の主観による自らの健康感を「健康状態」として表現している。

② 経済

〔調査対象者の経済的なゆとりの状況〕

調査対象者の経済的なゆとりの状況（図表 10）は、“苦しい”が 18.2%、“普通”が 64.6%、“ゆとりがある”が 16.4%となっている。

経済的なゆとりの状況は世帯形態による差がみられ、ひとり暮らし世帯では“苦しい”が 23.8%と回答者全体に比べて高い（図表 12）。

〔経済的なゆとりと活動状況〕

経済的なゆとりの状況別にみた活動に参加している理由（図表 34）のうち、「社会のために役に立ちたいから」の割合は、経済的にゆとりがある人では 37.0%であるのに対し、苦しい人では 15.9%にとどまっている。この結果は、社会的な活動を行うには経済的なゆとりが必要であることを示している。

また、経済的なゆとりの状況別にみた団体や組織での現在の役割（図表 24）において、“主導的な立場についている”の割合をみると、経済的なゆとりがある人は他の回答者に比べて高い。逆にいえば、80 歳代の高齢者が団体や組織で主導的な役割を担えるようになるためには、経済的なゆとりが必要であることが示唆された。

〔経済的なゆとりと生きがい・幸福感〕

経済的なゆとりの状況は、生きがいの有無（図表 49）に対し、強い関連がみられた。また、経済的なゆとりの状況別にみた幸福感（図表 58）についても同様に顕著な傾向がみられる。

健康状態は生きがいのみに作用するのに対し、経済的なゆとりの状況は生きがいおよび幸福感の双方ともに関連が強いのである。

ただし、経済的なゆとりの状況によって「とても幸せ」の割合は大きく変わるものの、「とても不幸」および「やや不幸」については、顕著な格差はみられない（図表 58）。

仮に、選択肢の「とても幸せ」および「やや幸せ」を“幸せ”、「とても不幸」および「やや不幸」を“不幸”と言い換えれば、今回の調査結果からは“幸せ”感は経済的なゆとりの影響を受けやすく、“不幸”感は経済的なゆとりとは異なる要素が影響している様子がうかがわれた。

③ ころ（生きがいおよび幸福感）

〔調査対象者の生きがいおよび幸福感の状況〕

生きがいの有無（図表 46）では、“生きがいを感じている”が 75.2%と多数を占め、“感じていない”と回答した人は 15.4%のみである。

一方、幸福感（図表 55）では“幸福”が 70.8%を占め、“不幸”は 5.9%にとどまっている。幸福感は 0 点（不幸）から 10 点（幸せ）までの 11 段階の点数として回答され、調査の平均値は 7.01 点である。平成 23（2011）年度の国民生活選好度調査（内閣府）における平均値は 6.41 点であることから、本調査はかなり高めの結果といえる¹⁾。

〔生きがいおよび幸福感を構成する要件〕

■活動への参加

活動への参加頻度別にみた生きがいの有無（図表 53）をみると、参加頻度が高い人は生きがいを十分感じている人の割合が高い。もっとも、活動への参加頻度別にみた幸福感（図表 62）においては、参加頻度が高い人と低い人における差はみられない。ただ、活動に参加していない人は、生きがい・幸福感ともに顕著な差がみられる。

なお、約 10 年間における活動頻度の変化別にみた生きがいの有無（図表 54）をみると、活動頻度が変わらないもしくは増えた人は、活動頻度が減ったもしくはやめた人に比べて生きがいを「十分感じている」の割合が高い。しかしながら、約 10 年間における活動頻度の変化別にみた幸福感（図表 63）においては一定の傾向はみられない。

これらのことから、現在の活動頻度や過去からの活動頻度の変化は、生きがいには影響するものの、幸福感には影響しにくいことがうかがえる。

■活動による成果への満足度、やりがい、社会的評価

団体や組織での役割別にみた生きがいの有無（図表 52）をみると、団体や組織の代表者、リーダーや役職等について運営を担っている人は生きがいを十分感じている人の割合が高い。一方、団体や組織での役割別にみた幸福感（図表 61）では、代表者、リーダーは“幸せ”の割合が高い。これは、社会的な評価が影響していることも一因として考えられる。

なお、活動に参加していない人は、何らかの形で団体や組織に参加し活動している人に比べて生きがい・幸福感ともに低く、顕著な差がみられる。生きがいや幸福感を高める上で、まずは何らかの形で活動に参加することが第一歩になると考えられる。

¹⁾ ただし、国民生活選好度調査は 18～80 歳未満の男女を対象としており、ナルクに加入している 80 歳代の高齢者を対象とする本調査では対象者が異なる点に留意する必要がある。

■他者との交流

近所づきあいはソーシャルキャピタルを構成する主要な要素でもある。近所づきあい別にみた生きがいの有無（図表 51）をみると、近所づきあいの程度が深まるほど生きがいを“感じている”人の割合が高くなる傾向が顕著にみられた。もっとも、近所づきあいがほとんどない人においても 36.8%が“感じている”と回答しており、生きがいは近所づきあいがなくても感じるものであることが示唆されていた。

近所づきあい別にみた幸福感（図表 60）においても、親しくつきあっている人ほど「とても幸せ」の割合が高まっている。もっとも、これは「どちらでもない」・「やや幸せ」が「とても幸せ」に置き換わった結果であり、“不幸”が“幸せ”に置き換わったわけではない。

ここで“不幸”の割合に着目すると、近所づきあいがほとんどない人は“不幸”の割合が 26.4%で、あいさつをする程度の人 6.0%を大きく上回っており、近所づきあいがほとんどない人とあいさつをする程度の人との間で大きな差が生じている。以上のことから、近所づきあいが深まるほど生きがいや“幸せ”感は高まる。

一方、近所づきあいがほとんどない人は生きがいは持ち得ても“不幸”感が大きい。たとえあいさつ程度の近所づきあいであっても他者との交流が生じることによって“不幸”感は一気に緩和されるのである。こうしたことから、あいさつをする程度であっても近所づきあいの有効性がうかがえた。

④ 家族

本調査では、回答者の世帯形態をひとり暮らし、夫婦のみの世帯およびその他同居世帯の 3 つに区分して分析している。世帯形態別にみた経済的なゆとりの状況（図表 12）をみると、世帯形態によって経済的なゆとりの状況に差が生じている様子が明らかとなっている。

また、性別にみた世帯形態（図表 9）では、男性は夫婦のみの世帯が多くを占めているのに対し、女性はひとり暮らしが多くを占めている。これは平均寿命の違いのほか、女性の回答者はサービス利用を目的としてナルクに加入した人が相当数いることが影響しているものと考えられる。さらに、現在の 80 歳代の高齢者は男性が社会に出て働き、女性は家庭を守るという風潮の影響を受けてきた世代でもある。今回の調査でもそうした意識の違いが浮き彫りとなった。

具体的には、性別にみた団体や組織での現在の役割（図表 22）において主導的な立場についている人の割合は男性が 33.0%であるのに対し、女性は 11.0%にとどまっている。

一方、性別にみた活動に参加している理由（図表 33）において男性は女性に比べ、「社会のために役立ちたい」や「地域に暮らす人の義務だと思う」など社会的な理由が比較的多くみられるのに対し、女性は「自分のためになる」や「参加していて楽しい」など個人的な理由が比較的多くなっている。

⑤ 交流

近所づきあいの状況（図表 40）は、「親しくつきあっている」が 40.5%、「立ち話をする程度」が 30.1%、「あいさつをする程度」が 24.1%であり、これらを合わせると 94.7%が何らかの近所づきあいをしており、「つきあいはほとんどない」はわずか 2.5%である。本調査はナルクの会員が対象であるため、閉じこもりがちな回答者は少なくなっているものと考えられる。

上述したように、近所づきあいに関して特徴的であったのは、近所づきあい別にみた幸福感（図表 60）において、近所づきあいがほとんどない人では“不幸”の割合が 26.4%で、あいさつをする程度の人との 6.0%を大きく上回っており、近所づきあいがほとんどない人とあいさつをする程度の人との間で大きな差が生じていたことである。

これまで幸福感を構成する要件として健康であることや経済的な豊かさ、活動に対する社会的評価などが挙げられたが、これらはいずれも“幸福感”を高める方向で作用している。

一方、“不幸”の割合に着目すると、「普通」と答えた回答者とより高い状態の健康や経済的なゆとりのある回答者では“不幸”の割合にほとんど差がみられなかった（図表 58、図表 59）。

そうしたなかで、近所づきあいがほとんどない人と、あいさつ程度であっても関係がある人では“不幸”の割合に大きな差があるという結果（図表 60）は興味深い。

これを政策面で整理するのであれば、80 歳代の高齢者の“幸福感”を高めるには健康づくりへの支援や経済的ゆとりが有効であるものの、“不幸福感”を和らげることはできない。地域で孤立した人の不幸福感を緩和するには、身近な地域においてゆるやかな人間関係を構築する地域福祉的な対応が求められるものと考えられる。